

ルシャナの仏国土 三

第三章 森と湖の伝説

一. 帰郷

フェリーは、陸地を望むところまで来た。

「あれがライランカ。人口五千万人、森が大部分を占めているわ。比較的平和な土地よ。」

ファイーナが言った。懐かしい、我が故郷……。

「ほんとに森だけみたいだ……。」

リュウが呟いた。陸地の上に見えているのは、ただ森、森、森である。一ヶ所だけ開けているのが恐らく港町なのであろう。

午前九時、船はゆっくり接岸した。一行がタラップを降りると、二人の女性が迎えに来ていた。ファイーナと同じ藍色の髪だ。

「お帰りなさいませ、姫様。」

「ナディア、迎えに来てくださったのね。どうもありがとう。」

「お身体の具合はいかがですか？」

「ええ、一度だけ意識を無くしてしまったけど、それだけです。」

「山形医師から連絡は受けております。心配しました。ご無事のご帰国何よりでございます。」

「心配かけて、本当にごめんなさい。……紹介します。彼女は宮廷医務官のナディア・サディラ。こちらは藤原景時と神崎リュウ。これからのライランカを担ってもらう二人です。」

二人はそれぞれに挨拶した。

「それから、婚約した加賀篤史。」

彼女は恥ずかしそうに言った。

「お初にお目にかかります。よろしく願い申し上げます。」

「こちらこそ。どうかよろしく願い致します。」

二人目の女性の顔を見ると、篤史は思わず駆け寄った。

「カーサル！カーサルじゃないか！元気だったかあ？」

「兄上、お久しぶりでございます。」

「あ、兄上？」

景時とリュウは目を丸くした。篤史はオルニア人のはず……。

ファイーナはなるほどという表情を浮かべているだけで、驚いた様子はない。

「お、すまん。君たちは驚いたかもしれんな。実は、私には血の繋がりのないきょうだいが六人いる。このカーサルもそのひとりだ。」

「加賀警視正、貴方は一体……？」

「兄上、私、今の名前はイリーナです。……初めてお目にかかります。ライランカの環境局長官をしております、イリーナ・タラノヴァと申します。」



「は、はい！どうかよろしくお願ひします！」

景時とリュウは慌てて挨拶を返した。

「姫様、皇帝陛下がお待ちかねでございますよ。どうぞ馬車へ。」

宮殿は、大陸のほぼ中央部にある。ファイーナは懐かしさに目を細めながら中へと向かっていった。(二年しか経っていないから、何も変わってなくて当たり前だけど、本当に何もかもが懐かしいわ……。木々の木漏れ日も、リラの花の香りも、鳥のさえずりも……。)

宮殿の入口ではアルティオが娘の帰りを今か今かと待ちわびていた。

「お父様！」

ファイーナは父親に抱きついた。アルティオも久しぶりに会う娘を愛おしく抱きしめる。

「ファーニヤ、待っておったぞ。障りはないか？」

「はい、お父様。……後継者も連れ帰りました。」

「君たちが……。私がこの国の皇帝・アルティオだ。まあ、入りなさい。」

「は！」篤史が続く。

景時とリュウもついていった。(この方が皇帝陛下なんだ……。)

四人は『白菊の間』へと導かれた。丸テーブルを囲んで話ができる部屋である。ファイーナが父帝に、ひとりひとりを紹介していく。

「まずは、藤原景時。彼が次期皇太子です。」

「うん。これからよろしく頼む。」

「はっ！藤原景時と申します！」

「それから、神崎リュウ。ライランカ警察本部に入ってもらおうと思っています。」

「よろしく頼む。君はハーフかな？」

「はい。母がタユタヤ出身です。」

「そうか。もともと、もうすぐそんなことは気にしなくてもよくなるがな。」

(どうということだろう?)リュウは思った。

「そして、婚約した加賀篤史です。」

ファイーナが恥ずかしそうに言った。

「ライブラ、久しぶりだな。まさかこのような形で君と再会しようとは思わなかったぞ。」

「は。陛下、誠に申し訳ございません！」

(ライブラ？どうということだろう?)

景時とリュウは、先程から呆気にとられっぱなしだ。篤史はこの国の環境局長官とはきょうだいだと言い、皇帝からはライブラと呼ばれ、まるで以前からよく知っているかのようだ。

「君は、本当に娘と結婚するつもりなんだね？公卿になったら、生涯後戻りは出来ないぞ。」

「はい。姫はもう私にはなくてはならない存在なのです。どうかお許しください。」

篤史はアルティオの前に跪き、深く頭を垂れた。

「篤史……。」

ファイーナは胸が熱くなった。

そのときアルティオが思わぬ行動をとった。自ら椅子をどけて、篤史に近づき、膝を曲げて彼の手を取ったの



である。

「ライブラ、私はむしろ嬉しいのだよ。この娘の花嫁姿を見られるとは思っていなかった。娘を頼む！」

「陛下……。」

二人はもはや互いに信頼し合う父親と娘婿だった。

アルティオは話を先に進めた。

「まずは明日の朝、夜明けに帰化礼を行う。心の準備も必要だろう。ファーニャ、後から詳しく教えてあげなさい。景時君とリュウ君、ライブラは、まずその旅装を解いて来るがよい。今夜はゲストルームに泊まりなさい。案内させよう。」

二. ライブラの記憶

同じ日の午後、アルティオとの会食後、ファイーナ、景時、リュウの三人を前に、篤史が自らのことを話し始めた。

「ひと世代前のことだ。ヴィクトル・ルマールという環境設計家がいる。彼の願いはただ一つ、世界を美しくすること。すなわち自然と共存し、人々が生きやすい世界を作り上げることだった。

彼はある時、大地震から一つの街の人々を救ったのが縁で、紫政帝陛下と面識を得た。そして母と逸れて一人になっていた幼い私を託された。そのときに紫政帝陛下はライブラと名付けてくれていたらしい。彼はライランカ人が多いアリオルカ温泉郷でも赤子を引き取ることになり、その後、各地の孤児院に行き子供を預かった。

そうして集めた子供たち七人に、自分の夢、知識、技術の全てを授け、それぞれの母国に補佐役として放った。

ただ、私の身元は数年後に分かったらしい。弁護士・加賀信頼の一人息子・加賀篤史、この名が本名だ。加賀の父は、ヴィクトルの手元を離れた私を、心から愛してくれたが、五年前に亡くなった。

きょうだいのうち、三人は官僚になって直接的に政治に関わっている。カーサルもそうだ。

だが、全員がそうなったわけではない。私はどうも不器用で、政治や宮廷には向かんと考えた。もともと警察官にも憧れていたしな。

紫政帝陛下も私のことは可愛がって下さった。環境設計の分野では表に出ずにお仕えしたいとお話ししたら、それならライブラの名で宮殿に来て、補佐をしてくれと仰った。あとは君たちが知る警視正としての私だ。

今から十八年前、当時十五歳だったファーニャにも会ったことがある。アルティオ帝陛下は娘が即位するに相応しいかどうかを外部から呼び寄せた幾人かの判断に委ねたのだ。おそらくその時は全員が即位に賛成したはずだ。

だが、病になりオルニアに後継者探しに来たファーニャと出会って愛して、私の補佐役という役割は終わった。それに、今さら私の父ひとりの考えに頼らなくても、世界はもう『惑星市民条約機構』の元で安泰の体制になっている。これからは国家間の問題よりも、むしろ社会の治安のほうが大切になってくるものと思う。危険な思想を持つ者たちを一旦社会から遠ざけ、本来持つべき平穏な考え方に戻して、自ら本当の幸せを掴み取ってもらう。それが社会の役割なんだ。



今から思えば、私は職業に警察官を選んで正解だったかもしれないな。…まあ、そういうことだ。」

(加賀警視正…。)

初めて聞く篤史の生い立ちと深い造詣に、景時とリュウは感動し、まとめて聞いたファイーナは彼の大きさに改めて引き込まれていた。

続いてファイーナが『帰化礼』について説明する。

「ライランカの帰化は特殊です。この宮殿はテティス湖という湖のほとりに建てられているの。ライランカの皇帝は代々このテティス湖を守ってきた。帰化礼は、そのテティス湖に全身を浸すことなの。その時、彼女から新しい名前を貰うのよ。」

「彼女？」

「リュウ君、貴方はもう知っているはず。」

「あ、守護精霊テティスだ！」

「そう。オルニアで貴方に髪の色のことを尋ねられたことがありましたね。あの時私は途中から帰化する場合については言及しませんでした。それはまだ貴方がライランカに来て、帰化することを考えていなかったからです。」

覚者ルシャナ様の『星法の書』…貴方たちも読んだことあるわよね。今では伝説みたいにされてしまっているけれど、あれは事実なの。

あの中に記されている通り、テティス湖は惑星の極北で、そこには法力が集まっている。私たちの髪が藍色なのは大量の法力を受け続けているからなのです。だけど、それを広く知られてしまうと、守護精霊テティスが実在していることも話さなければならなくなる。

ライランカ人は、存在を秘めておくことで、守護精霊テティスを守って来たの。…リュウ君、貴方のお母様もね。

そして、貴方に髪のことを尋ねられた時、私もその場では言えず、隠していました。ごめんなさい。貴方たちも、これからは守護精霊テティスを守っていくのよ。

彼女と会って名前を授かって湖から上がってきた時、貴方たちの髪は完全な藍色になっているでしょう。さっき父が心の準備と言ったのは、そのことなの。自分の髪の色が変わるのだから、予めそのつもりでいなとね。さらに、精霊と出会うなんて、世界でもこことウユニくらいだから。」

「守護精霊テティスは本当にいるんだ…。」

もともと母親から話を聞いていたリュウも驚いたが、篤史も初めて聞く話だった。

「ライランカにそんな秘密があったとは…。」

「えっ、加賀警視正もご存知なかったんですか？」

景時が聞き返した。

「知らなかったよ。だけどね藤原君、世の中に、何もかも全て知っている人間なんているかね。」

三. 帰化礼

明け方近く、三人は前の晩に部屋に届けられた浅葱色の上下の衣装を着て、ファイーナに伴われてテティス湖のほとりに出た。アルティオが待っていた。

「おはよう。これから一人ずつ湖に向かってもらう。なお、ここでは履物を脱いで素足になりなさい。この先を進んでいくと、ほどなくして守護精霊テティスに出会えるはずだ。まずは、次期皇太子の景時、君が行きなさい。」



「はい。」

景時は言われた通り奥へ進んだ。気のせいか、だんだん霧が深くなっていく。

と、その中にほんのりと青く人影が見えてきた。こちら歩いているのだが、人影のほうも近づいてくるようだ。目の前二メートルくらいのところで、影が若い女性だと分かった。

「よく来ましたね、景時。」

女性は、にっこり微笑んだ。彼女も藍色の髪だ。

「僕の名前を…。貴女が守護精霊テティス様ですか？」

「あら、様付けは必要ないわ。ただテティスとだけ呼んでちょうだい。私はもう貴方のことも知ってるし、ね。」

テティスは景時の瞳を覗き込むように見つめた。

「外の時間は止めてあるわ。ゆっくりお話ししましょう。」

「えっ？」(時間を止める、だって?)

「ふふふ、驚いた？もともと、止めるというよりも、私たち二人だけが時間と同じ速さで遡っていると考えるほうが正確ね。私にはその能力が備わっているの。私、元々はウユニ人なのよ。生まれたのは三千年前。」

「それじゃ貴女は幽霊…いえ、失礼しました。何というか、魂だけの…。」

「そう。別に気にしてないから安心して。」

まだ国同士が戦争していた頃、乗っていた船が難破して、海に飲み込まれた私は、ライランカの岸辺に打ち上げられた。普通なら監禁とかされてもいい状況だったけど、ライランカの人たちは私をただの遭難者として温かく介抱してくれたわ。スパイじゃないとか、そんなことは全く考えてなかったみたい。たしかにそんなつもりはなかったけど、とにかく信じてくれたのが嬉しかった。

だからその時の怪我がもとで死ぬ時に私は強く願った。もしも生まれ変われるのなら、この土地を守護する力を持つ存在になりたい、って。

そして気がついたら、この姿になっていたのよ。時間と空間、天気を操る能力を持つ精霊にね。

藍色の髪を持つ人たちは、すべて私が守りたい人たち。…そう話したら、今度は逆にこの国の人たちみんなが私を守りますと言ってくれるようになった。

だから今も私はライランカと共にあるの。」

景時はこの話に感動した。

「強い絆なんですね。」

「ありがとう！貴方にもきっとわかってもらえると思ったわ。」

「あの、ひとつ質問していいですか？この国の人たちの髪は、何故藍色なんでしょう？ファイーナ様は、法力の影響だと仰っておいででしたが。」

「そうね。その通りよ。原因は、惑星ルシアの真の自転軸にあるこの湖。法力が集まり、散る。それを近くで浴び続けているから、ライランカ人の髪は独特の色になっているの。」

私も、覚者ルシヤナ様に直接お会いしたことがあるわ。『星法の書』に書かれていることは事実なの。」

「そういえば、『宝華品』には、確か貴女のこと…。答えてくださって、どうもありがとうございました。」

景時は思い出した。今では伝説視されている書物に書かれていたことを…。もしいつかこの人が救われるのなら…。

彼の心を読んだテティスは悲しみを隠して、なおも明るく振る舞う。



(彼には、底知れぬ優しさがある。ありがとう、景時……。)

「だからあ、そんなに丁寧な言葉はやめて欲しいのよねえ。お願いだから、もっと普通にして。……さあ、水に入
って。息は苦しなくなるから。」

「はい。」

テティスの言う通りだった。水に入っても何ともない。この湖は、たしかに普通じゃないんだ……。

やがて頭の上まで浸かった彼は湖から上がった。テティスが語りかける。

「湖に顔を写してごらんさい。」

彼は水面を覗き込む。そこには、完全な藍色の髪を持つ自分が見えた。

「僕の髪が……。」

「貴方は今、ライランカ人になったのよ、アレクセイ。」

「アレクセイ……それが僕の名前なんですか？」

「そう。貴方が自分の名前を気に入っていたの知っています。アレクセイは、古代ライランカ語で『光の時』とい
う意味。いわば直訳しただけ。どう？気に入ってもらえるかしら？」

「テティス……どうもありがとうございます！この名前、大切にに使わせて頂きます！」

「よかった。あ、普段は端折ってアリョーシャでもいいわよ。それじゃ、あとはお願いな。貴方ならきっと皆んなか
ら慕われる皇帝になれると思う。愛しているのに自ら譲る優しい人……。」

「えっ？」

彼は驚いたが、テティスは、そのあとは続けずに、ただ微笑みただけだった。

「何かあったら、また気楽に来てね。私から話したい時もテレパシーで呼びます。でもこれからは今日みたいに
あまり堅苦しなくないでね。じゃあまた。」

テティスは消えた。

(やけにぶっちゃけた精霊さんだなあ。だけど、僕が改名に抵抗を感じてたこと知ってた。ソフィア警視に憧れて
いることも……誰にも話してなかったのに……。)

彼が帰ると、いの一にリュウが訊いてきた。

「おかえり。早かったね。それに、すっかり藍色の髪じゃないか！で、どうだった？新しい名前は？」

早かった、だって？あんなにたくさん話したのに？じゃあ、やっぱり時間が止まっていたのか。

「ああ、気さくな精霊さんだね。僕は、アレクセイという名前になった。普段はアリョーシャ。」

「良い名前をいただいたな。次は、もうすぐ公卿になるライブラ、君だ。」

アルティオが促した。

四. リフレイン

「この湖の水は特殊で、全身を浸しても呼吸ができるの。だから、ここで死ぬことは不可能よ、篤史。」

テティスが言った。

「テティス……。そうか、貴女は僕の心まで知っているのですね。さすがに精霊だけのことはある。」

篤史は力なく呟いた。実はファイーナが亡くなったら自分はその亡骸を抱えて入水するつもりだったのだ。



「ほかのところで死のうとしても無駄よ。私がなんとしてでも貴方を止める。私はファーニヤが羨ましい・・・最愛の人と結ばれて、そんなにまで愛されているなんて。」

ファーニヤの思い出をいちばん強く残せるのは貴方なのよ。どうかその思い出をずっと離さないでいてあげて。貴方が生きている限り、ファーニヤも生き続ける。そして、貴方をずっと暖めてくれるはずよ。」

テティスは懇願に近い口調だった。

「・・・わかった。約束します。」

篤史はテティスの目を見て言った。

「でも、貴女はファーニヤと同じ眼差しをしていますね。失礼だが、愛する人がいらしたのではないですか？」

精霊は少し驚いたが、ふうっと息をついて親しげに微笑んだ。

「ふふ、貴方は本当によく似ていますよ、彼に・・・。洞察力が強くて、でも不器用で堅苦しい喋り方しかできないところ。そう、私にも憧れの人がありました。告白はできなかった。片思いだったし、私が死んだから。」

でも今でも私は彼のことを思い出すと暖かくなって勇気づけられるの。貴方にもそういうふう生きていって欲しいのです。」

「それが貴女のお気持ちだったのですね、テティス。これからは僕もライランカの一人として、ファーニヤと一緒に貴女を守っていきます。」

「ありがとう・・・。じゃあ、湖の水に頭まで浸かって。」

「はい。」

彼が湖から上がると、テティスは彼の新しい名を口にしました。

「貴方のライランカでの名前は、クファシル。かつて英雄とまで謳われた名医と同じ名よ。彼は、手をかざすだけで身体の病を治してしまうばかりではなく、どんなに頑なな人の心にも入って行って闇を消した。」

人というものは、自分が本当に幸せであれば悪いことなどはおおよそ考えもしない。闇が人を不幸にするの。

貴方も同じように考えていますね。だから貴方にはこの名前が相応しいと思います。」

「英雄と同じ名など、僕などには勿体ない気がしますが・・・。」

「私は貴方を信じてる。それに、命名権が私にあるのを忘れたかしら？ふふふっ・・・。」

精霊は悪戯っぽく笑って消えた。

「テティス・・・。」

彼が戻ってくると、今度はファイーナが話しかけた。

「どうだった？私、これから貴方を何て呼べばいいの？」

もったもな質問だ。

「クファシル・・・英雄視されたほどの名医の名前らしい。僕には果たして相応しいのかどうか・・・。」

「そう・・・。でも、たしかに私にとって貴方は名医かもしれない。」

「ファーニヤ・・・。」

「ほらそこ、二人でいつまでも見つめ合っている場合ではないぞ。あとにしなさい。」

父帝が笑いながら言った。二人は慌てて少し離れる。(ファーニヤ、幸せにしてみらうんだぞ・・・。)

アルティオはリュウの肩を叩いた。

「さあ、君の番だ。行きなさい。」



五. 新たなる旅立ち

リュウとテティスの対話が始まった。

「心強き人よ、ようこそテティス湖へ。」

「え、心強き人って…僕が？」

「リュウ、貴方は幼い頃からその髪の色が違うことでずっといじめられてきましたね。でも、それを乗り越えて立派な大人になった。貴方は強い人よ。自分では意識してなくてもね。」

さらに貴方は、自分よりも弱い立場の人のこともよくわかってる。ファーニャにも、そう言われたことがありますね。」

「そういえば…はい、ありました。」

「本当に強い人って、誰のことも別け隔てなく優しく接するもの。それをああでもない、こうでもない取り沙汰して人を攻めてばかりいる人は、本当は自分に自信がないのよ。不幸なことね。」

ところで私、元々はウユニ人なのよ。…」

それから彼女は、前の二人に話したことをまた話して聞かせた。

「ウユニは全員がそれぞれ異なる力を持つ超能力者たちの国。みんなが違う力や容姿を持っているの。だから、少しくらい違ってたって誰も全然気にも留めない。」

ウユニ人から見ると、他の国で虐めがあるほうが異常に映るのよね。」

「なるほど。そうかもしれませんね。」

リュウは感慨深く言った。

「貴方もこれから藍色の髪になるわけだけど、その優しさと強さ、忘れないでね。それじゃ、湖に入って。」

テティスが促した。が、リュウは、ふと立ち止まる。

「…あ。」

「どうしました？」

「まだお聞きしたいことが。」

「ん？何かしら？」

「この国の人たち、姓がある人となない人がいるみたいに思うんです。何故なんですか？」

「ああ、アルティオやファーニャのことね。それに、アレクセイとクファシルにも私がファーストネームしか告げなかったから？」

彼らは王室一族になるでしょう？本当はテジャスって苗字があるのだけれど、普段は使う必要がないだけ。」

「テジャス？…ファーニャ様がオルニアで名乗っておられた名前と同じだ。」

「そう。彼女はファーストネームだけを変えてオルニアの身分証明書を作ってもらっていたの。きっと、もし周りに知り合いが誰もいない時に倒れても、ライランカの誰かが気づいて宮殿に知らせてくれるのではないかと思ったのね。」

だからリュウ、貴方が帰化したあとの名前は、新しいファーストネームにカンザキと付くの。貴方もそのほうがいいでしょ。」

テティスは、僕は帰化してもあの両親の子どものままでいてもいいんだと言いたいんだ…リュウは胸が熱くなった。そうして、何故ライランカの人たちが彼女を守りたいと思うのかもわかったような気がした。

「そうだったんですか。納得しました。では水に入らせていただきます。」



彼が上がると、テティスは新しいファーストネームを口にした。
「貴方はレオニード、強き獅子。これからは、レオニード・カンザキって名乗るのよ。
それじゃまた、時々は何か話しに来てね。」

彼は待っていた人々に、もらった名前と経緯を話した。ファイーナは言った。
「その通りよ。私は苗字だけそのまま使っていた。オルニアでは、苗字で呼ぶ人とファーストネームで呼ぶ人が混在してるから幸いだったの。」
「それじゃ、僕も正式にはアレクセイ・テジャスになるのか。」

さっきまで景時だったアレクセイが呟いた。
実は、世界がまだ王制だった時代に二つの王国が国王同士の婚姻で一つになった際、現在湖畔宮殿がある一帯を治めていたアレーシャ女王は敢えてクスコ王国に嫁ぐ形にしたのだ。そのため、ライランカ王室はクスコ語由来の姓を名乗っている。

アルティオが満足そうに言った。
「さて、これでもう帰化礼は終わりだ。皆、これからはライランカ人として生きていって欲しい。私も頼もしい跡取りたちが出来て嬉しい。
そろそろ朝食の準備が出来ている筈だ。レオも警察庁からの迎えが来るまで私たちと一緒に食べなさい。迎えはおそらく昼前になるだろう。」

「はっ！」
そうだ、僕は警察官なんだ。…リュウ＝レオは自覚した。これまで一緒に暮らして来た友も上司も、これからは仕えるべき王族なのだ…。

彼がそんなことを考えていると、アレクセイが近寄ってきて言った。
「レオ、念のため確認しておくが、僕たちはお互い共に汗かき警察官訓練を受けてきた親友だ。二人っきりの時には、僕をアリオージャと呼んでくれよ。頼むぜ、相棒！」

「アリオージャ…。」
「そうだぞ。ファーニヤが何のために君を見込んで連れてきたと思っている。」

クファシルも親しみの笑みを浮かべていた。
「加賀警視正…いえ、クファシル様…。」

門の前でファイーナとクファシル、アレクセイ、レオニードの四人が待っていると、ほどなくしてライランカ警察本庁からピョートル・ヤブラスキー警部が迎えに来た。

「私は、ライランカ警察本庁人事課のピョートル・ヤブラスキーだ。君が皇帝陛下肝いりの人材か。期待しているよ。」

「はっ！レオニード・カンザキと申します。よろしく申し上げます！」

彼は敬礼した。それから見送りに出た三人に向き直り、再び敬礼した。
「それでは、皆さん…お世話になりました！」

「元気でな。」クファシルが声をかけた。
「ときどきは顔を見せに来て。待っています。」と、ファイーナ。
「本当にいつでも来いよな。」アレクセイが言った。

「それではまた。失礼します！」



レオニードは去っていった。

六. 市民議会

惑星ルシアの惑星市民憲章では、皇帝は年に二回、施政について各国の市民議会で承認を得なければならぬと規定されている。この年の秋季議会では、当然アレクセイの立太子と、ファイーナ姫とクファシルの結婚の承認に重きがおかれた。

アレクセイは語った。

「僕は、オルニアの樹木医の一人息子として育ちました。両親は僕が美術大学の寮に入っているあいだに火事で亡くなりました。

画家を目指していましたが、なかなか売れず、街中で似顔絵描きのアルバイトをしていたところを、警察学校の副校長を名乗る女性に警察官になってみないかとスカウトされました。

本当に厳しい訓練でした。しかしその甲斐あって一年後には訓練生全員が巡査に合格し、さらにその後新しく『警察官級剣士』の資格が創設されるほどになったのです。

そろそろ配属が決まるという時になって、僕は姫様からご身分を明かされ、次期皇太子に・・・というお話いただきました。姫様におかれましては後継者を育てるために警察学校の副校長になられていたとのこと。僕は、卒業間近までその副校長を名乗る女性がライランカのお姫様だとは知りませんでしたから、お話を聞いてとても驚きました。

ずいぶん迷いましたが、国際剣術競技会で自分に多くの知識や技術が与えられていることに気づきました。姫様が見込んでくださったからには、もしかしたら僕も皇帝という重責を担えるかもしれない、その時そう思ったのです。

そして、帰化した時に守護精霊テティスともお会いしました。彼女は僕に対してはとてもチャーミングに接してくださいました。もしかしたら彼女は相手によって違う姿を見せるのかもしれませんが、少なくとも僕は気さくな方だと感じました。

僕も得ることができた警察官級の黒い剣の黒には、何者にも染められずに普遍的な正義を守るという意味が込められているそうです。僕も皇帝という重責を、その精神で努めていきたいと思います。

もし皆さんのご承認を頂けるのであれば、僕はこの国と世界全体のために力を尽くします。」

守護精霊テティスが気さくに接するのなら、彼はそれだけの力量がある人なのだろう、と人々は思った。事実、テティスは相手によって違う話し方をするらしいことが知られている。一度、途中帰化した人々の話をまとめたところ、皆それぞれに話の内容や話し方がずいぶん異なることがわかったのだ。

こうして、アレクセイは次期皇太子として承認された。

次に、クファシルに質問が飛ぶ。

「私は、もともとオルニアの弁護士の息子でしたが、母と帰省したときに地震に遭い、一旦は紫政帝陛下の元に保護されていたようです。その後、ヴィクトル・ルマールという環境設計家に引き取られ、自然保護と人々の生活を良くするために役立つ知識と技師を叩き込まれて帰されました。自分の身元を知ったのは、その直後ですが、実父はその後癌で亡くなりました。ルマール夫妻も、十年前に海で亡くなっています。

しかしながら自分は華やかな雰囲気には馴染めないだろうと考え、警察官として生活しながら、紫政帝陛下のお側で環境設計の分野でお手伝いをしておりました。



今から考えると、私は職業に警察官を選んで良かったのかもしれませんが。世界はこれから人ひとりひとりが本当の幸せを確立して、社会全体を穏やかで優しい状態に保つことが大切になってくると思います。その時に重要な役割を担う職業の一つが警察官だと思うからです。

紫政帝陛下は、その時すでに新しい警察官の在り方を思案されており、そこにファイーナ姫から後継者育成の依頼があったため、私を校長に、ファイーナ姫を副校長に据えて、新しい警察官の育成に当たらせてのです。アレクセイもその時の訓練生でした。

ただ、誰にとっても予想外だったのは、私が姫を守るべき立場にありながら、愛してしまったことでしょう。今の私は、姫のためなら何でもする覚悟ができています。どうか結婚をお許しいただきたい。」

彼もありのままを話した。帰化する前の晩、アレクセイとレオニードに話した内容と同じである。入水の件やテティス自身の過去の話は伏せたため帰化した際の会話の内容は少なからざるを得なかったが、彼から滲み出る器の大きさと冷静沈着な話し振り、さらにテティスから伝説の名医と同じ名を貰ったことで承認には十分だと思われた。

何より、愛し合う者たちを引き止めることは誰にも出来ない。ファイーナの幸せを願うことは、ライランカ市民共通の思いだったのである。

財政局長官オーディブ・カトヌフが隣にいたイリーナ・タラノヴァに尋ねた。
「ヴィクトル・ルマール・・・どこかで聞いたことがある名だと思ったが、イリーナ殿、貴女のお父上ではなかったか？」
「はい、確かにルマールは私にとっても父親です。今、クファシルとして壇上で話しているのは、血は繋がっていませんが兄なのです。」
「なんと！」

国民健康局長官タバサ・ムクシウが手を挙げた。
「クファシル様にお尋ねします。
ファイーナ様におかれましては、おそらくお付き合いされることを遠慮されたのではないかと推察されるのですが。」
タバサは、ファイーナをよく知っていたし、もしも自分が同じ立場・・・つまり余命宣告を受けているひとりの女性であったなら、愛する人を巻き込むことはしなかったはずだと考えていた。
「はい。彼女は始め、お付き合いはオルニアにいる間だけにして欲しいと言いました。約束してくれなければ、お付き合いはできないと。おそらく彼女にとっても考えあぐねた末の辛い決断だったと思います。
しかし私は、やがてはその約束が守れなくなるだろうと予感していました。
私は、彼女が微笑むのを見たい、ずっとそばにいて微笑みを見ていたのです。」
ファイーナは改めて彼からのプロポーズを思い出していた。
(あの時と全く同じね・・・。私が心から幸せだと思わなければ、貴方も自分が幸せだとは考えてくれない・・・。本当に、貴方は私でいいの?)

七. 二つの王冠

十月十日午前十時、湖畔宮殿の大広間で、アレクセイの立太子礼と、ファイーナのクファシルとの結婚式が合



わせて行われた。

各国の皇帝や駐在大使、ライランカ国内の局長クラスが列席している。

開始前に、アルティオはファイーナの支度部屋に入った。中ではファイーナが正式な民族衣装に少し装飾を施した花嫁の姿になっている。

「綺麗だぞ、ファーニャ。」

「お父様…ここまで育てて下さって、ありがとうございました。」

「何を言う。私たちはこれからもずっと一緒に住むではないか。むしろクファシルとアレクセイという家族が増えるだけのこと。そうであろう？」

アルティオは努めて明るく振る舞った。花嫁の父として寂しくないといえは嘘になるが、たとえ残りわずかでもこれからも共に暮らせることに変わりはない。新婚夫婦の部屋は、かつて彼自身が皇太子時代に妻のカナリア妃と暮らしていた『鈴蘭の間』である。食事のたびに顔を合わせることになるのだし、時には親子で相談しなければならぬことも多くあるだろう。

それにしても、娘の顔に亡き妻の面影を幾度となく探してしまうのは何故であろうか…。

そこへ、クファシルとアレクセイも入ってきた。

「綺麗だ…。」

クファシルが言った。普段から美しいとは思っていたが、こうして華やかながら薄化粧した彼女は、また一段と美しく感じる。

「本当に輝いて見えます、姫。」と、アレクセイ。

アルティオ、花嫁姿のファイーナ、その婿のクファシル、次期皇太子アレクセイの四人が入ると、会場内が大きな拍手に包まれた。

彼らはまず各国から招いた皇帝たちの席を回って挨拶をしていった。

オルニアの紫政帝は感慨深く二人を見た。

「この度は誠にめでたい。おめでとう。君たちはお似合いじゃな。」

「ありがとうございます。紫政帝陛下には、ひとかたならぬご厚意をいただき、感謝してもしきれませぬ。」

ファイーナが言った。本当に、この皇帝が助けてくれなければ、クファシルにもアレクセイにも巡り会えなかった筈だ。

ウユニのオンネット帝は、新しく皇太子になる青年に見覚えがあった。国際剣術競技会でずば抜けた技術を見せた警察学校の一団、あの中にいた顔だ。さしている剣もまさしく黒い剣である。

「お二人とも、ご結婚おめでとう！たしか、アレクセイ殿と言われたな、もしや先日の国際剣術競技会に参加されていた方かな？」

「はい、確かに参加しておりました。陛下からの予期せぬテストのことも記憶しております。」

アレクセイが答えた。

「やはりそうか。これはますます面白い！私は無類の武術好きでしてな。いつか特殊能力なしで立ち会いをお願いしたいものだ。」

「はい、ご要望とあらば是非。」



音楽の国・カルタナのレスライン帝は女帝で、ファイーナより少し年上だが仲が良かった。七歳くらいの男の子がいる。

「レスライン帝陛下、ブルクハルト皇子もようこそお越しくございました。」

ファイーナは女帝とハグし、その皇子にも微笑みを投げかけた。

「本当におめでとう！お幸せにね。…クファシル様、この人はしっかりしてはいますが、泣き虫で甘えん坊なところがあります。どうかよろしくお願いします。」

「やはり…私もそうではないかと思っておりました。」

二人のやりとりを聞いたファイーナは顔を赤らめて下を向いてしまった。

幼い皇子はいつもとは違う大人たちをずっと不思議そうに眺めている。アレクセイが気がついて、片膝をついて話しかけた。

「皇子、初めてお目にかかります。この国の皇太子になるアレクセイと申します。どうぞよろしく。」

男の子は笑顔になった。

「ブルクハルト、この方にも片膝をついてご挨拶しなければなりませんよ。この国の皇太子殿下です。」

母帝が言った。皇子はアレクセイと同じように片膝をついた。

「はい、母上。…失礼しました、皇太子殿下。お目にかかれて光栄です。ブルクハルトです。」

壇上の中央には、白樺の葉をモチーフにした冠がふたつと結婚指輪一対が置かれている。白樺はライランカの国樹だ。

アルティオが挨拶する、

「この度は、我がライランカの立太子礼にご参列いただき、誠に有り難く存じます。今まさに皇太子となるアレクセイは、オルニアにて我が娘ファイーナが二年の歳月をかけて育てた逸材です。どうか助けてやっていただきたい。それではアレクセイ、こちらに。」

アレクセイが舞台中央に進む。

「ライランカを頼む。」

「はい。私の全力を尽くして、この国を守ります。」

軽く膝をついた彼の頭に王冠が載せられ、会場全体が拍手で満たされた。

アレクセイが下がると、アルティオは次にファイーナとクファシルを呼んだ。

「これが我が娘ファイーナです。本来ならばこの娘が即位するはずでしたが、病で余命宣告を受け、即位を断念しました。

しかしながら、良き伴侶を見つけたようです。ここにいるクファシルは、元はオルニア警察にて警視正を務めておりました。我が婿として申し分なき者と存じます。これからは公卿としてお見知りおきいただきたい。」

彼は二人を並ばせて祝福し、クファシルにも地味なデザインではあるが白樺の冠を与えた。指輪の交換が行われる。

「クファシル、娘を頼む。ファーニャ、幸せになるんだぞ。…二人とも幸せにな。」

暖かい父の眼差しと言葉に、花嫁衣装と王冠を纏ったファイーナの目から涙が溢れ落ちる。

「お父様…。」

クファシルがハンカチで彼女の頬を拭い、誓いのキスをした。



会場からはまた拍手が沸き起こった。

この様子を、レオニード・カンザキも会場の端から見ていた。彼の新しい上司になったバルドル・ノマロフ警部が特別な計らいで彼を会場警備の増員枠に加えてくれたのである。

(お二人とも、どうかお幸せに……。アリオーシャ、よかったな。しっかりやれよ。)

彼の脳裏には、警察学校での思い出が次々と浮かんでいた。厳しくも優しくかった校長と副校長、講師たち、共に汗をかいた仲間たち、ちょっと変わった話し方をする博士とアシスタント、いろいろ世話をしてくれた職員のみなさん……。

そういえば姫が倒れた時には、亜矢さんが薬を飲ませ、アリオーシャが背負い、僕が先導したっけ……。亜矢さんやジェシカは今どうしているだろう……。

八. 鈴蘭の間

結婚式当日の夕食会の後、二人は普段着に着替えて『鈴蘭の間』に下がった。これからはしばらくは、この部屋が二人の居室となる。

ファイーナはクファシルに背を向けて窓際に腰を下ろし、改めて左手薬指の指輪を見つめていた。

「どうした？今日は疲れたか。無理もない。ゆっくり休むといい。」

クファシルが近づいて来て、彼女の肩に触れながら顔を覗き込む。

「クファシル、本来なら今夜が初夜になるのよね。でも、私たちはもう……。」

彼女は俯いて顔を赤らめる。

「もうフェリーの中で結ばれた、か。」

クファシルは優しく微笑んだ。

「でもね、ファーニャ。僕がフェリーの中を選んだのは、それが君が姫君でない最後の時間だったからでもあるんだ。君をひとりの女性として抱きたかった。」

また、あの時とは決定的に違うことがある。僕たちは今日から正式な夫婦なんだ。これからは何の遠慮も要らない。思い切り僕に甘えてくれ。心から幸せにしたいんだ。今夜はもう本当に眠るだけにしよう。寄り添ってね。」

彼は、ファイーナに寝間着に着替えるように言って、自分も着替えると、彼女をベッドに誘(いざな)って、添い寝した。

「あったかい……。」

ファイーナは心から安心しきって眠った。

翌日は、謁見室のひとつで順番に閣僚の挨拶を受けた。最後はイリーナになった。

「兄上、本当にファイーナ様を幸せにしないと、私が許しませんわよ。あの手紙でどれほど驚いたことか！アルティオ帝陛下がお優しいから良かったけれど、本来ならお手討ちものです！」

「分かってるよ。相変わらず手厳しいな、お前は。」

クファシルは照れくさそうに頭を掻いた。

「まあっ、何だか面白い。ふふっ。」

ファイーナは笑った。二人を別々に知っているだけに、きょうだい同士のやり取りをしているのが彼女には新鮮に映る。それに、頼りがいがある人だと思っていたクファシルが、妹にやり込められて、たじたじになるとは思



わなかった。

(彼も普通の人なのね。意外に気さくなところがあるし・・・何だかほっとする。)

ファイーナはますます彼が好きになった。

クファシルは妹に言った。

「リーナ、近いうちに旦那を紹介しろ。こんなませたじゃじゃ馬の犠牲者をな。」

「何ですってえ！」

ファイーナはとうとう吹き出した。思い切り笑った。

「ファーニャ？」

「ごめんなさい。でも、きょうだいていいものね。子供のように話せるんだもの。」

イリーナが言った。

「おこがましいかも知れませんが、私も姫様の義妹です。兄が何かしでかしたら、私にお任せを。」

「ありがとう、リーナ。そうさせてもらうわ。」

「おいおい・・・参ったな。監視が二人もいるのか。勘弁してくれ。」

三人は揃って笑った。

その日の予定が全て終わった。クファシルはシャワールームに行って、その後ファイーナにもシャワーを浴びてくるように言った。

ファイーナがシャワーを浴びて、脱衣籠を見ると、着ていた服が無くなっていて、バスローブしか置いていなかった。今はそれしか必要ない・・・。ファイーナにもその意味は分かる。しかし、その裸体をまた彼に見られるのかと思うと、シャワールームからなかなか出られなくなった。

「ファーニャ、何してるんだ？ 迎えに来た。」

クファシルが扉を開けた。床に屈み込んでいた彼女は顔を手で覆う。

「いや・・・恥ずかしい・・・。」

男の手が彼女の両肩に触れた。

「こんなに冷えて・・・体に障る。」

体がふわっと持ち上げられて、動いていく。そのまま静かにベッドの上に寝かされた。

「ファーニャ、顔を見せてくれ。僕だけに女としての顔を見せて。」

彼はバスローブを脱ぎ捨てて、ファイーナの体に覆いかぶさる。彼女の両手を顔から引き剥がした。その時ファイーナは、彼がすでに全裸であることを知った。

「クファシル・・・。」

唇が重なって、頬や胸を男の唇と指がなぞる。ゆっくり続く愛撫の中で、紐がほどかれ、バスローブが彼女の身体から完全に離れて大きく広がった。下半身も優しく弄られる。彼女は乱れ、喘いだ。心も身体も濡れていく・・・。

彼はまだ冷静さを保っていた。彼女の呼吸があまり激しくなり過ぎると、本当に体に障る。

時折強く抱きしめてゆっくり射て、彼女の動揺が収まるのを待った。それは彼自身にとっても最高の快感の瞬間でもあり、彼女には気付かれない、彼なりの気遣いでもあった。

「いい笑顔だ。」

静まり返ったベッドで、二人は抱き合っている。自分の胸にすっぽり包まっているファイーナの髪を、クファシル



は手ぐしでとかしていた、

「僕だけが君のその顔を見られるんだ。君を満たしてあげる。だから一緒に幸せになろう。」

「篤史、愛してるわ、とても。」

「それでいいんだ、ファーニャ。」

夜明け前の僅かな光が、お互いの顔を浮かび上がらせていた。

九. 海賊ホルス

一ヶ月後…。

船籍不明の大きな黒い帆船がライランカに近づいているという連絡が入った。警察局長のラファエルが駆け込んでくる。今にも避難命令を出しそうな勢いだ。

「陛下、いかがいたしましたしょう？」

「まあ、落ち着きなさい。…ん、そういえば…。」

アルティオは、最近クファシルから聞いた話を思い出した。

「ラファエル、まずクファシルを呼んできてくれないか。たしか、近々国外から訪ねてくる者がいるはずだと言っていた。もしかしたらその者かもしれぬ。」

ラファエルは、出鼻を挫かれたような気がしたが、とりあえず彼を探しに行った。

ラファエルは、やがてクファシルを連れて戻ってきた。

「クファシル殿下をお連れいたしました。」

「ご苦労。」

クファシル、船籍不明の帆船が近づいているそうだ。君の訪問者かな？」

クファシルは、ラファエルに尋ねた。

「船の名前は分かるかね？」

「はい。ローズナイト号と書かれているそうです。見張りの者の話では、大きな黒い帆船で、まるで海賊船のようだと。」

彼は緊張している。海賊船が近づいて来ているとなれば、無事では済むまい。しかし、その報告を聞いたクファシルの反応は、彼の予想に反するものだった。

「そうか。それなら危険はないはずだ。その船は私の弟が所有している船だ。船籍不明というのも相変わらずだな。人騒がせな奴で申し訳ない。私がいに行けば事は済む。」

「そうだったのですか。しかし、船籍が不明となると、我々としては極めて心配でございます。どうか護衛をおつけください。」

「ありがとう。しかし、弟に会いに行くのに、ご大層な警備を付けるのは忍びない。私と皇太子の二人で行くことにするよ。実は、今回は皇太子と弟を引き合わせたいと思ってるんだ。」

「えっ！しかしそれではますます危険では？」

「私もこのあいだまでは警察官だった。だから君の心配もよく分かるつもりだ。私が今の君の立場だったら、同じことを言うだろう。しかし、どうか私たちが信じて欲しい。」

クファシルはあくまでも冷静だった。



「ラファエル、彼の言う通りにしてやってくれないか、彼は無茶はやらん男だ。」

アルティオが助け舟を出した。皇帝にまでそう言われては仕方が無い。

「わかりました。クファシル殿下、どうかくれぐれもお気を付けて。せめて港の外まで数人を付けさせて下さいませよう。」

数時間後、クファシルはアレクセイを伴って港にやってきた。

「アリオーシャ、似顔絵は持ってきてくれたかね？」

「はい、ご希望とのことでしたので、原画から模写して、今ここに持っています。」

「ありがとう。渡しておきたい奴がいるんだ。」

目の前には黒光りする帆船が横付けされている。

「さて、久しぶりにホルスに会えるかな。」

クファシルはこともなげに海賊船とおぼしき船に向かって歩き出す。その後姿を見ながら、アレクセイは、改めてクファシルという男の大きさを痛感した。

(やっぱり今の僕はこの人には敵わないや……。僕は本当に皇帝としてやっていけるのかなあ。)

二人が船に近づいていくと、出入口近くに立っていたセーラー襟の制服を着た男達が二人に気付いて視線を向けた。あらかじめホルスから話を聞いていたらしく、軽く頭を下げた。

「クファシル殿下ですね。すみません、親方はさっきまでここにいたんですが……。すぐに呼んで来ますから。アリオ。」

「ほいさ。」

一人が中に走って行った。

程なくして、船長服を着込んだ大柄な男が中から出て来た。小走りで近づいて、クファシルの顔をまじまじと覗き込む。

「ライブラ兄(にい)?……。わっ、ほんとにライブラ兄だ! 髪の色も変わっちゃまって……。信じらんねえ!」

クファシルは微笑んだ。

「まあ、そう言うな。成り行きだ。」

久しぶりに会うきょうだいがあるように、彼は男の肩を抱えた。

「ライブラ兄……。だけど会えて嬉しいぜ。何年ぶりかなあ。」

クファシルは、傍らに立っていたアレクセイを紹介した。

「手紙にも書いたが、皇太子も連れて来た。アレクセイだ。」

「ほお……。こっちが皇太子さんか。」

ホルスはまたまじまじと覗き込む。

「初めてお目にかかる。ホルス・ジルティガーと申す。」

アレクセイは軽く会釈して言った。

「アレクセイです。」

彼には、ホルスが海賊とはとても思えなかった。言葉付きは一見乱暴だし、凄腕剣士の気配も感じるが、おおらかで屈託のない笑顔を見せる。さっき親方と呼ばれていたようだが、確かにまるで大工の棟梁だ。

船長は自慢げに船内を案内した。行く先々で乗組員が彼らに敬礼する。乗組員たちは皆、水兵服に身を包



み、腰に剣を帯びている以外は、一般商船のように見えた。一人だけ眼帯をしてはいたが。

ホルスは二人を船長室に通した。

「さて、と…まずはご結婚おめでとう、かな。まさか姫さんと結婚してしまうとはなあ。地味を好むライブラ兄らしくもねえ。」

ホルスは、ほんの数分間にすっかり打ち解けた笑顔になっていた。

「仕方あるまい。たまたま好きになった相手が姫だったというだけの話だ。」

「ふっ、相変わらず堅苦しい話し方だなあ。なんとかなんねえのか。」

言葉は乱暴なままだが、船長は親しげに笑っている。

「お前に言われたくないな。相変わらず無国籍を通してみたいじゃないか。おかげで私たちがここに来るのに、警察局長にたいそう心配されてしまったぞ。」

「俺は、とにかく国だの何だのと縛られたくねえんだ。面倒くせえ。世の中、そんなものなくたって生きていけるぜ。」

(なるほど、そういう考え方もあるんだな…。)

と、アレクセイは思った。だが、みんながみんな彼のように強く生きられるわけではない。国はそのためにあるのだ。

そこへ、一人の女性がティーセットを持って入ってきた。

「ノア、俺の兄貴だ。それに、ライランカの皇太子。」

「ノアと申します。お話は伺っております。」

「初めまして。弟がお世話になっています。私はライブラ。今はクファシル公卿と呼ばれていますが。」

クファシルが言った。

ノアと呼ばれた女性は、少し離れた小さいテーブルの上でお茶を入れ始めた。

「彼女がお前の嫁さんか。」

「ああ。彼女も孤児でな。この船には五年前から乗り込んでいたんだが、同じ屋根の下、暮らしているうちに…という訳だ。正式に妻に娶ったのは、三年前になる。」

入れた茶を配りながら、ノアが口を開く。

「私、彼のことが好きになってしまって。でも彼はキャプテン。…気持ちを押し殺して、一度船を降りたんです。だけどクルーのみんなが、私を探して連れ戻してくれて、そのとき彼もプロポーズを…。」

「ノア、その話は勘弁してくれ。むずがゆくなる。」

ホルスが慌てて遮った。

「なんだ、お前だって大恋愛だったんじゃないか。」

クファシルも微笑む。

「ところでな、彼を連れてきたのには理由が三つある。一つは顔合わせだが…。」

アリオーシャ、似顔絵を出してくれ。」

「はい。」

アレクセイは折りたたんでポケットに入れていた絵を取り出して、テーブルに置いた。

それは、春野亜矢の許嫁の似顔絵だった。アレクセイ自身が亜矢から顔の特長を聞き取って描いたものだ。あちこちに散った警察学校の仲間たちも同じ絵を持って行った。

「もしこの顔をどこかでみたら、知らせたいのさ。尋ね人なのでな。」



「わかった。船内に貼って、指示しておこう、もうひとつは？」

「よろしく頼むよ。それではアリオージャ、君の剣を見せてやってくれないか。」

「は、はい。」

彼は下げていた剣を鞘ごと外して縦にし、鞘を少しだけずらして刀身を見せた。ほんのりと青く光を放つ銀色の刀身……。

「こりゃあ、何だい？見たことねえぞ。」

「新しく認められた警察官級の剣だ。今現在、これを持っているのは、私の教え子だけだ。そのことも教えておきたかった。彼らに会って、もし剣を交えることになっても、彼らは私には子どものようなものだ。決して敵に回すな。」

「分かった。」

(そうか、僕を連れてきたのは、いろいろ理由があったんだ。さすが警視正……。)

クファシルとホルスは、互いにそれぞれの経過を話した。

ホルスの話はこうだ。彼の母国マクタバは、砂漠の中に点在するオアシスが緩やかに連携する連合国家である。それぞれが独立国家だといってもいい。皇帝は一応いるにはいるが、あまり統率する必要がない。たまに起きる些細な揉め事を仲裁するくらいしか仕事がないのである。ゆえに自分も出る幕がないので、世界中の海を巡って、勝手気ままにやっている、というのである。

「父上の言いつけには背いてるかもしれねえが、世の中になんか思い通りにいかねえこともいっぱいあるからな。」

「だけど、経済的にはほどほどでも、俺んところは幸せな国だと思うぜ。みんなが自由で平等なんだ。弱きを助け強きを挫く、そんな誇り高い奴らばかりなのさ。俺も海の上でそうしている。」

十. 忍びの剣術

「ところで、久しぶりにやらないか？」

ホルスが両手人差し指を何度か叩き合わせた。剣術の意味だ。

「良かろう。」

三人は船長室から出て、階段を下りた。女子供が平和そうに行き来している。

「これは……。」

アレクセイは、海賊船の中を知って驚いた。ホルスが笑う。

「皇太子さんよお、この船を甘く見てもらっちゃ困るぜ。この船はな、確かに外目からは海賊船にしか見えねえが、非道はしねえ。こいつらは乗組員たちの家族だ。幸せにするのが俺の責任てえ訳よ。」

「ホルス殿……。」

「着いたぜ。稽古場だ。」

そこは紛れもなく武術の稽古場だった。ホルスはクファシルと竹刀で闘い会う。

(そんな馬鹿な！警視正は、一度も警察学校の稽古には参加しなかったのに、あれほど強かったのか！)

アレクセイはまた目を見張った。しばらくして、クファシルがアレクセイを呼んだ。

「ホルス、また強くなったな。どうやら私ではもう太刀打ちできんようだ。彼に代わってもらおう。」

「兄上……。」



ホルスは少し寂しそうな顔をした。が、すぐにアレクセイに微笑みかけた。

「それじゃ、相手になってもらおうか、皇太子さん。」

ところがホルスはアレクセイとの立ち会いでは苦戦した。単に若さだけではない。さらに通常では存在しない筈の『忍びの技』の気配を感じる。狙うのも手や足のみのようだ。新たな警察官級剣士というのも、伊達ではなさそうだ。彼は、竹刀を退いた。

「なるほどな。確かに強い。お見それしたぜ、皇太子さん。」

アレクセイは言った。

「ホルス殿、その『皇太子さん』はやめてもらえませんか？ 貴方はクファシル殿下の弟さんなのですから。

それに、僕はあなた方を海賊というだけで恐れ、またどこかで見下していました。さん付けで呼ばれるには値しません。アリョーシャで結構です。」

アレクセイは、ホルスに頭を下げた。ホルスは静かに彼の肩を叩いた。

「それじゃまたよろしく頼んまあ、アリョーシャ。」

やがて日も暮れようという頃、三人はそれぞれ名残惜しそうに別れを告げた。

「また来いよ！」

クファシルとアレクセイは船が見えなくなるまで見守っていた。

「良い人ですね。」

「まあな。言葉が乱暴なのが玉に瑕なのだが。しかし、どうやら君のことは気に入ったようだな。」

「それにしても警視正。貴方は警察学校時代には訓練には参加されていませんでしたね。何故あんなに強いのに隠されていたのですか？」

「ふっ、君はまだ私を警視正と呼ぶのかね。まあ良い。

実は、ルマールの父は、私たちに武術の家庭教師を付けていた。一人になっても自分の身を守れるようにね。だが、その家庭教師は忍びの出身だった。傍目には普通の二級と見分けがつかないが、真から強い者には『忍びの剣』が入っていると知れてしまう。だから、あまり表には出さなかったのだ。」

「それじゃ、亜矢さんやはるかさんは・・・。」

「ああ、知っていたよ。もっとも、その前に私がその家庭教師の行方を春野君に尋ねたがね。

しかし、滝田君とセルジオ君には、私の剣を知られなくなかった。あの二人に知られたら、私が普通の警察官ではないのではないかと疑われる。私のことはいいが、ファーニャにも疑いの目が向く可能性があった。」

「そうか、だから訓練に見えなかったんですね！ ファイーナ様のために。」

「うん。剣術の稽古は、春野君とやっていたね。それからナジブのところにも出向っていた。ナジブは近かったし、忍びの者の存在すら知らないからね。」

「それで、その家庭教師の方は？」

「行方は分からない。春野君も分からないと言っていた。『忍び』はあくまでも影・・・闇の存在なのだと彼女は言った。誰にも知られることなく生き、誰にも知られることなく闇へと帰る・・・なんて哀しいのだろうね。」

「影・・・闇・・・。」

「十数年前に紫政帝陛下が解放令を出されて、彼らは戸籍と自由を与えられたが、精神はまだ影のままという者も多かろう。私たちの家庭教師も、そうなのではないかと思っている。もはや再び会うことはあるまい。

しかし、そうは言っても私たちきょうだいは、彼には会いたい。ホルスもイリーナも、君が知らない他の者たちも、きっとそう思っている筈だ。」

「警視正・・・。」



間に消え、もう二度と会えない存在……。思い出を抱える人が、ここにもいた……。アレクセイは、心を熱くするのだった。

一一．皇太子と白樺

ホルスと会って帰ってから、アレクセイは猛然といろいろなことを勉強し始めた。

アルティオの公務に付き添うのは勿論のこと、ライランカのあちこちの行事にも可能な限り参加し、休みの日も足繁く図書館や博物館に通うようになったのだ。

(もっともっと勉強しなきゃ！クファシル殿下に追いつかない！)

アレクセイにとって、クファシルは今や上司ではなく目標になっていた。クファシルもアルティオも確かに強い。だが、それは単なる力ではなく、豊富な知識と人脈に裏打ちされた強さなのだ。

そうして半年ほど経った頃、アレクセイは高熱を出して二、三日ほど寝ついた。

「このところ、だいぶお疲れのようでしたから、少しご休養されてはいかがですか？」

ナディアの夫で同じく宮廷医務官を勤めているウラジミルが言った。

「皇帝陛下もファイナ様もクファシル様も、たいそう心配なさっております。国民も殿下の御身をご案じ申し上げております。皇太子殿下はもう殿下おひとりのお身体ではないのです。」

「すまない、ワロージャ。これから気をつけるよ。」

この頃には、彼にも王族の言葉遣いが身につき始めていた。

そこへ、アルティオが見舞いに来た。

「あ、皇帝陛下……申し訳ございません。」

アレクセイはとっさに起き上がりかけた。医師が彼の体を支える。

「良いから良いから。今はそのまま寝ていなさい。熱は下がったようで良かったな。ところで、半月くらい宮廷を離れてみたらどうかね？ハンザループの森に私たちの別邸がある。環境が変わって良いのではないか？」

「そうですか……。陛下がそう仰るのなら……。」

こうして、アレクセイは別邸で静養することになった。

ファイナは彼に新しい画材を用意してくれた。

「貴方、しばらく絵を描いてなかったみたいだから。久しぶりに絵を描けば、きっとすっきりすると思うわ。お勉強は、また治ってから再開すれば良いのよ。」

そういえばそうだった。警察学校時代の後半くらいから、絵のことはすっかり忘れていたような気がする。

翌朝、森に行く馬車はもう来ていて、その側に制服姿のレオニードがもう一人の人物と待っていた。

「レオ！どうして君がここに？」

「君の護衛さ。紹介しよう、別邸の執事のマクシム・バザロフさんだ。」

「お初にお目にかかります、マクシム・バザロフと申します。マーカとお呼び下さい。殿下が別邸にご滞在される間、身の回りのお世話を致します。」

マクシムは膝をついて挨拶した。立ち上がると結構背が高かったが、柔らかな話し方をする男だ。



彼らは初夏の美しい緑を抜け、森の別邸に着いた。そこでもまた新たな出会いが待っていた。

「動植物学者のパーヴェル・ナガノです。研究の傍ら、私の手伝いをしてくれています。」

マクシームが紹介した。

「パーヴェルです。この森の中の動植物に関する情報はお任せください。」

彼は中肉中背、レンジャーのような服装をしている。

「手数をかける。よろしく頼む。」

「王族言葉、だいが板についたようだな、アリョーシャ。僕は、ここではおおっぴらに友として接していいと陛下直々に仰せつかっている。そのことは、このお二人ともご承知だ。」

レオニードが言った。

「そうだったのか。陛下のお気持ちはとても嬉しいな。」

「中へお入り下さい、殿下。ただ今お茶をお持ちします。」

「どうもありがとう。」

別邸の中は、こじんまりして落ち着いた雰囲気だ。入ってすぐに暖炉が見えた。窓は大きく日の光を部屋へと導き、そのままテラスに続いている。

「ここの冬は寒うございます。今は開けてありますが、寒い時は雨戸を閉めます。」

パーヴェルが説明する。

「貴方は、この建物にお詳しいのか？」

「はい。私は、普段はマクシームシュカとこの建物を管理しております。そして、王族の皆様がご滞在のあいだは、散策のお供を致します。」

「そうなのか。よろしく頼む。」

「はい。…しかし殿下、どうか『貴方』ではなく、私の略称・パーシャか、名前を呼び捨てで呼び下さい。初対面でも構いません。ライランカの者は皆臣下にございます。」

「わかった。ありがとう、パーシャ。」

「は。」

彼はにっこりして頷いた。

テティスが言っていたな。この国の人々は分け隔てしないと。帰化したばかりの僕のこと、皇太子殿下として接してくれるらしい…。

翌朝、アレクセイは久しぶりに油絵の道具を取り出して、別邸の庭の絵を描き始めた。絵具や溶かし油、すすぎ油の匂いが懐かしい。気がつくとランチ、また気がつくと夕暮れ…そんな日が四日ほど過ぎた。

「綺麗な絵ですね。木々の葉も正確に描かれている…。」

パーヴェルが感心して言った。

「ありがとう。…ん？何か聞こえないか？」

「え？」

二人はしばらく耳をすませた。が、パーヴェルには鳥のさえずりと木々の葉音の他には何も聞こえないように思われた。

「私には鳥の声と葉ずれの音しか聞こえませんが…、」

「いや、もっと別の何かだ。何かの声なんだ。」

そう言うと、アレクセイは森の中へと歩いて行く。



「あ、殿下、お待ちください。」

パーヴェルが慌てて付き従った。

アレクセイは、大きな白樺の木の前で止まった。

「ここだ……。この木が何か訴えている。」

「えっ？」

パーヴェルは我が耳を疑った。自分には特に変わった音は聞こえない。皇太子の身に何か起きてしまったのだろうか……。

アレクセイは、丹念にその木を調べ始めた。幹に触れ、耳を押し当て、あるいは木のうろを覗き様々な角度から観察したようだった。そのうちに「ははあ、これだな。」と呟いて、やおら剣を抜いた。

「殿下、一体どうされたのです？」

「見てごらん。ここに変色したコブがある。思うに、これはばい菌が入って化膿したものだ。これをえぐるんだよ。」

見ると、確かにそれらしきものがある。彼は剣で変色した部分を残さずえぐり取った。

「さあ、これでいいはずだ。父の知識が今になって役に立つとは……。」

「殿下のお父上様？とおっしゃいますと……？」

「父は樹木医だったんだ。私にはあまり関わりはないものと思っていたのだがな。」

「左様でございましたか。たしか殿下はオルニアからいらしたのでしたね。失礼ですが、お父様のお名前は何と？」

「藤原司というが……。知っているのかな？」

「ドクター・ツカサ！では、殿下はあの方のご子息でいらっしゃいましたか！これは奇遇な……。知っているも何も、私はあの方から大恩を受けた者でございます！」

彼の話によれば、ある時、この白樺林が害虫のために危機に瀕した。アルティオの依頼でそれを丹念に駆除し、撲滅させたのが他ならぬ司である。彼の熱意と高い技術に感動したパーヴェルは、彼のライランカでのアシスタントとなり、その後多くを学んで博士号を取得して今日に至っている、とのことであった。

「父はあまり家にいなかったが、この森にも来ていたのか。……それにしても、本当に先程まで私には聞こえていた声が、君には聞こえていなかったとは、どうした訳だろうね。」

「さあ……。」

二人が首を傾げていると、白樺の木から声が聞こえてきた。今度はパーヴェルにも聞こえている。

「ツカサの子と弟子よ、私たちは再び君たち親子に世話になった。何も出来ないが、せめて足元にある枝を少し持って帰ってくれ。枝を暖炉にくべた時の香りが私からの礼だ。本当にありがとう。これからはいつでも来て欲しい。私たちは君たちを歓迎する。……」

「今の声は……。」

「私にも聞こえました。殿下がお聞きになっていた声は、あの声だったのですね。おそらくは白樺の精でしょう。

私たちは、どうやらすごい方を皇太子にお迎えしたようです。」

「テティスだけでなく、木々の精霊たちからも話しかけてもらえるなんて、まるで夢みたいだ……。」



一二. 青空

「ところで君、過労で倒れたんだって？！

森の別邸の屋下がり、アレクセイとレオニードは二人で茶を飲んでいて、白樺林が、さやさやと音を立てている。

「ああ、ちょっと頑張り過ぎたかなあ。少しでもクファシル殿下に追いつきたくて。」

「そうだったのか……。」

「今の僕じゃ、クファシル殿下には到底及ばない。皇帝に即位して、やっていけるかどうかさえわからない。そう思ってな。だけど、たかが勉強のし過ぎで倒れてるようじゃ、情けないよな。」

アレクセイは寂しく笑った。

「アリオージャ、クファシル殿下は確かに凄い。だが、君は君だ。君は、君のいいところを活かせ。結果は後から付いてくる。

パーヴェルさんから聞いたぞ。木の精霊と話ができるんだって？ 凄いじゃないか。」

「ありがとう。しかしあれは父の功績だ。」

「それは違う。白樺の木は、他の誰でもない君を認めたんだ。僕はそう思う。

だって、そもそも植物学者のパーヴェルさんがいるのに、白樺が助けを求めたのは森を初めて訪れた君なんだぜ。

だけど、パーヴェルさんが、君がおかしくなったのではないかと疑ったから、仕方なく彼にも声を聞かせたんだろう。

とにかく、君はファイーナ様選ばれた皇太子なんだ。何故選ばれたか、振り返ってよく考えてみるんだな。」

それだけ言うと、レオニードは黙って茶をすすった。

同じ頃、湖畔宮殿ではファイーナとクファシルが彼について話していた。

「アリオージャは、今頃どうしているかしら。レオをつけたから大丈夫だとは思うけど。」

「半年前からだったな、あいつが一生懸命に勉強し始めたのは……。ホルスに会わせて、刺激が強過ぎたかな。」

「彼がいないと、寂しいわねえ。まるで宮殿全体の火が消えたよう……。」

「今では、あいつも僕たちの家族だからな。」

クファシルは、よもやアレクセイが自分を目標に据えたとは思っていなかった。人は案外、自分自身のことはわかっていないものである。

翌朝、アレクセイは執事のマクシムに尋ねた。

「マーカ、まさかここには木刀だの竹刀だのはないよね？」

「いえ、熊や狼が出ますので、木刀を備えておりますが、それが何か？」

「何本ある？」

「二本でございます。」

「それは良かった。持って来てくれないか？ それから、レオを呼んでくれ。」

「かしこまりました。」



レオニードはすぐに駆けつけて来た。

「どうした？」

「すまん。最近立ち会いもしていないのを思い出した。相手をしてくれんか？」

「ああ、そういうことか。だが覚悟しろよ。手加減はせんからな。」

それから小一時間ほど二人は立ち会い稽古をした。アレクセイは息を切らしている。

「やっぱり腕が鈍ってるぞ、アリオージャ！これくらいで息を切らしてどうする！」

レオニードは容赦なくかかってくる。彼のほうは全く息が乱れていない。

その彼に、アレクセイは懸命に打ち込む。

「まだまだ！…もっと来い！もっとだ！さあ、かかってこい、レオ！」

パーヴェルとマクシムも少し離れたところから二人の立ち会いを見ていた。

「す、すごい…。凄すぎますよ！」

「そうですね。私たちには遠く及ばない世界です。」

「皇太子殿下があんなに激しい立ち会いをなさるとは思ってもいませんでした。穏やかそうな方なのに…。あれではまるで警護官が二人いるようなものです。」

「それに、それをすべて受け止めているレオニード殿、彼も相当ですな。警護官が一人と伺って、いかがなものかと思っておりましたが、あれでは確かにお一人で充分ですなあ…。」

やがて、レオニードのほうが先に木刀を収めた。

「今日はもうこのくらいにしておこう、アリオージャ。また明日やればいい。」

「ああ。付き合ってくれてありがとな。久しぶりに良い汗をかいた。」

アレクセイも木刀を収め、二人で一礼した。稽古の終わりだ。

(僕はいつのまにか、あまりにも多くのことを忘れかけていたような気がする…。)

翌日は、二人で話し合っ合気道をやることにした。双方、剣を置き、レオニードは制服の上着を脱いだ。

「さあ、いくぞ、アリオージャ！」

「来い！」

二人は組み合っ技を掛け合った。だんだん子供の喧嘩のような感覚になる。

やがて二人は、庭の芝生の上に並んで仰向けに寝転がった。空は青く、爽やかな風を感じる。

「ほんとはな…。」

「うん？」

「君も警察官になっていたら、一緒に働きたかったんだ。だけど、もういいや。きっとこれからもずっとこんな風になるだろうからさ。君は皇帝になっても、ここへ来て、今みたいに組み合っくれるんだろう？」

「そうだな。」

白樺がまたさやさやと音を立てた。

アレクセイは、予定を切り上げて十日目に帰った。マクシムとパーヴェルには丁寧な礼を言い、また来るからと伝えた。もう今はここにいる必要がなくなったと感じたのだ。



アレクセイが湖畔宮殿に帰ると、ファイーナが言った。

「アリオーシャ、貴方はもう私たちの家族になってるの。私、そう思うのよ。だから貴方もお願いだから尊敬語は使うのやめて。」

「しかし、姫……。僕は姫に連れてきていただいてこそ、この場にいられる人間ですよ。」

彼は、憧れの女性であり、大恩ある人からの突然の申し出に戸惑った。

「それじゃ、こう言うわ。貴方に尊敬語を使われると、私たちが調子狂うの。貴方、例えばお兄さんかお姉さんがいたら尊敬語使う？それと同じなのよ。」

「姫……。それじゃ、僕のことは家族だとおっしゃるのですか。」

「そうよ。いけない？」

クファシルも親しげに微笑んだ。

「僕も君のことは家族だと思っようになっているんだ。もう上司と部下という意識は捨てたらどうだ。そうだな、僕から先に『お前』と呼ぼう。」

「クファシル殿下……。」

そして、アルティオも口を開いた。

「アリオーシャ、私も君を息子だと思っているんだがね。もちろん君の本当のご両親をないがしろにする気など毛頭ない。ただ二番目の父ができたのだと思ってくれればいいのだ。」

「陛下……。」

そうして、アルティオはアリオーシャの肩を抱えた。それは父親が息子や娘にする抱擁だった。

お三人ともに自分を家族だと言ってくれている……。アレクセイの心に暖かい感情が湧き上がって来た。

「分かりました、父上……。それから、姉上、兄上！改めて、よろしくお願ひします！」

「アリオーシャ……！」

四人は笑顔で抱擁し合った。家族として……。

一三. 星祭りの相聞歌

七月、二つの衛星が重なり合って惑星ルシアの影に入って星空がはっきりと見える日に、ライランカは星祭りを迎える。人々は、夜になると外に出て、一年のうちでも比較的短くなっている満天の星空を見上げて愛である。

ライランカ王家でも、皇帝自らによる祝辞の後、国民の代表者たちを迎えての晩餐会が催された。そして、それら全ての行事が済んだ夜のこと……。

「ナディア、どこかでファーニャを見なかったか？」

クファシルはファイーナを探していた。しばらく前から彼女の姿が見えない。

「ファイーナ様なら、先ほどテティス湖のほうに歩いて行かれたのをお見かけしましたが。」

「そうか、どうもありがとう。」

星祭りの日、こんな時間にテティス湖で何を？……ライランカにはまだ不思議が多すぎる。

一年前、帰化礼を受けた場所に来た。彼は靴と靴下を脱いで裸足で湖に近づいていった。やはり霧が出て来たが、帰化礼の時ほどではない。二百メートルくらい先にファイーナらしき人影を認めた。



と、美しい声と琴の音色が聞こえてくる。(まさか、ファーニャ?)

近づいていくと、歌っていたのはやはりファイーナだった。胸に琴を抱えながら弾き語りをしていたのである。湖のほうに向いていたため、まだ彼が来ていることには気づいていないようだ。

(なんて澄んだ歌声なんだ! 初めて聞いた。…)

湖のほうに目を向けて見ると、そこにはテティスがいた。

「お迎えが来たようですよ、ファーニャ。」

「えっ?」

ファイーナが振り返る。クファシルの姿を認めると、彼女は顔を真っ赤にした。

「クファシル…。」

「お行きなさい。彼にこそ今の歌を聴いてもらったほうがいいわ。」

テティスは消えた。

クファシルが尋ねた。

「探したよ。テティスに何を聴いてもらってたんだ?」

ファイーナのほうは下を向いたまま答えない。ふと手許を見ると、紙を一枚持っている。彼が何の気なしに触ろうとすると、彼女は慌てて隠そうとする。

「だめっ!」

「どうしたんだ?そんなに恥ずかしがって。」

彼は紙を無理やり取り上げた。そこには全部で十六首の短歌が書かれていた。

「これは…!」

最愛と言える人にぞ抱かれたき桜も過ぎて紅葉も過ぎて
このまま出逢わなければと思えども逢えぬ哀しさ抱いて眠る
温めて抱きしめてとぞ言いたきがひとり身何も出来ぬ秋の日
出逢えたらいざ何もせず恥ずかしくなるらし我のもどかしさかな

君知らず愛遠ければしとねにて開放せし日々我も十八
求めても猶求めても指先は求むるものをただ遠ざける
ふるさとは君と言いたき宛もなき雪に埋もるる音ぞ哀しき
恋う人は最愛なくば恋ならぬ我を導く夢難かりし

少しだけ強引な彼求めたる恋なき私の夢の一片
そばにいてそのひとことが言いたくてされど人なき日々の永さや
我のみが小さく弱く映るごと鏡は見ずにひとひ過ごさむ
若き日は薄く紅引き歩きしを秋の夕べに重ねて遊ぶ

告げられて手に触れらるる夢を見る目覚めて清き雪積もりけり
愛しさよ全てをかけて肌で抱け君が思いのこと強ければ
かりそめのこの命とぞ思いけるそれでも絶えぬ胸の鼓動や



狂おしき君見たくあり我が夫よ我が身まもなく消えゆく定め

「これが君の歌・・・。」

「恥ずかしい！見ないで！お願い・・・。」

彼女は五弦琴を抱えて宮殿へと走って行ってしまった。

なんて熱い歌なんだ。これが君の内なる声だったのか・・・。僕に逢う前と、そして今の思いと・・・。テティスに初めて会ったとき、ファーニヤと似ていると思ったのは、きっと二人が同じ心を持っていたからに違いない。

クファシルは万年筆と手帳を取り出して、手帳に紙を乗せ、自分の歌を書き加えた。

わが妻よ永遠に愛しく光り増し君留まるは他ならぬ吾
君が夢聞きては思い増すばかり月の下にて素肌見まほし
湖に深く激しき君が沁む胸に抱えし琴よ収めよ
美しき君を抱いて日々過ごす今こそ吾の願い強まる

彼女は宮殿の廊下の隅に腰掛けていた。五弦琴もすぐ脇に置いてある。

彼が短歌を認めた紙を渡す。

「これが僕の返事だ。気に入ってくれるかな。」

「クファシル・・・。」

歌に目を通したファイーナは、顔を真っ赤にした。

「君の歌、もっと聴かせてくれ。綺麗な星空に最高じゃないか。」

クファシルは妻を抱き寄せ、口づけた。

「今夜は、本当に二人きりになれる所で過ごそう。森の中はどうか？」

暫くして、クファシルが言った。湖畔宮殿の敷地内には、森が一つある。場所柄、一般には開放されていない。更にその頃には、おおよその催し物が終わり、皆各々の部屋に帰って休んでいるものと思われた。

「そうね・・・。」

ファイーナは彼の言葉の意味を理解して俯いた。互いに相手の手の温もりを感じながら、二人は森に向かった。

彼らは森の奥深く、下草が綺麗に生え揃っているところに並んで座った。

「ところで、何故こんな時間にテティス湖で歌っていたんだ？いつもは夕暮れ前くらいだろ？」

帰国後、ファイーナは週に三日ほど、夕暮れ時に五弦琴を携えて湖に行っていた。クファシルは、それも王族女性の務めだと聞かされている。しかし、その時は彼女一人きりで行かなければならないとも。それ故に、クファシルがファイーナの歌を聞いたのはその夜が初めてだったのだ。

「星祭りは、異なる軌道を巡る二つの衛星が重なる日。二つの衛星が交わる時、それは男女の結びつきも意味する・・・。あるいは、孁星アルムが恋人イスカをみんなの目から隠して抱きすくめていると考えている人もいるわ。」

テティスは、愛されることなく命を落とした。愛の歌を歌ってあげると喜ぶの。お母様もそうしていたそうよ。」

「そして、それは歌う者の心そのものでなければならない。そうだね？」

「どうしてわかるの？」



「ただの民謡や伝承だったら、君があんなに恥ずかしがるはずはない。

特に後半は、僕に対する君の思いそのものだ。『そばにいて』…あれはプロポーズを受けてくれたときに君が言った言葉だ。そうだとしたら、他も君だと判る。

テティスと初めて会った時、彼女は君に似ていると思った。もしかしたら僕にくれたクファシルという名前も、テティスが生前実際に恋した相手の名前なのかもしれないよ。彼女からも、貴方はかつて愛した人によく似ていると言われたからね。」

「そんなことがあったの…。」

「僕たちはきっと、テティスにとっては過去に叶えられなかった夢の再現なんだ。

だけど、僕たちがこれからどうするかはまた全く別の話だ。君がもっと激しく抱かれたいと願っているのなら、僕も敢えて本能のままに君を抱く。」

彼は立ち上がって衣服を脱ぎ捨て、逞しい野生の体を剥き出しにした。彼女の正面に回り込んで膝をつき、両肩を掴んだ。ちょうど、二つの衛星による月食が終わり、その光が極北の白夜の空に加わって、真夏の夜明けのように視界を照らし始めた時だった。今、二人の瞳には相手の顔が間近に映っている。

「愛してる…。ファーニャ…。」

「クファシル…。」

二人は唇を重ねる。彼は妻の上に覆い被さって、ゆっくりと時間をかけて衣服を剥がしていった。男に抱かれる時、女は服を脱がされている時に最も気持ちが高ぶるものなのだと、本で読んだことがある。いや、正確に言えば、彼女との結婚を決めた直後、彼は彼女の病と性交に関する書籍を買い求め、彼女を精神面だけではなく肉体的にも幸せにするための知識を身につけていた。フェリーの一等船室で戸惑う彼女を冷静にエスコートできたのも、未体験ながら最後の目的まで熟せたのも、全てはその知識の成果なのだ。そして今、その知識が再び蘇る。

一糸まとわぬ美しい姿になった彼女を押し倒して、柔らかな乳房を強くまさぐる。首筋から乳房にかけての狂おしいキスと愛撫…彼は、愛撫の程度をだんだん激しくして、彼女の全身に施していった。身体を深く密着させて揺さぶる。

「僕は、君のため、なら、どんなことでも、やる…。前にも、そう言った、はずだ…。」

彼は息を切らして耳元で囁いた。

彼女は目を閉じ、彼の背中に両手を回した。胸が高まり、身体が震えた。

(今夜は違う…。)

肌に直接外の風が当たっているせいだろうか、彼の明確な意思を聞いたせいだろうか、本能が彼女にそう囁きかける。背中から愛の行為を受けるのも初めてだ。まるで無理矢理犯されているかのような感覚、頭の中まで痺れるような快感が彼女を襲い続ける。

「ねえ、少し待って…。本当に蕩けそう…。もう限界よ…。」

「抱きたい…。君が欲しい…。今の僕は獣(けだもの)だ…。」

そんな言葉の遣り取りも、互いをより一層高ぶらせる。

「…あ…ああ…。」

ファイーナは乱れて身悶え続ける。その夜は初めて彼女のほうからも身体を絡めつかせて幾度か交わった。誰から教わった訳ではない、本当に本能のままに。自分から抱きつくのは躊躇われる、そんな羞恥心が今、彼の情熱を受けて遂に崩壊したのだ。

濡れていく草の香りに身を委ねて、互いを呼び合う声なき声が森に広がる。フェリーの一等船室で初めて結ば



れたあの夜からはとても想像できないくらい激しい愛の行為が続いた……。

「……満足した？」

夜が更ける頃になって、自身も息を調えながら、クファシルがファイーナの耳元で囁く。今のファイーナからは羞恥心が全て無くなっている。ただただ、最愛の伴侶に心ゆくまで満たされた女の幸せだけが溢れているのだ。

「……うん……。とっても暖かい……。」

クファシルは、自分の胸に乗っている妻の髪と背中をゆっくりと撫でる。
(君は可愛い……。僕は本当に君を幸せにできたんだね。そして、これからもずっと一緒だ……。)

クファシルにとって、恥ずかしがり屋で甘えん坊のファイーナは何者にも替えがたく守りたい存在だった。彼女を笑顔にしたかった。だが同時に、やはり男として独り占めにしたい気持ちもあったのだと、彼は改めて噛みしめる。

「ここでなら、何の遠慮も要らない。……近いうちにまた来よう。」

だが、二人は知らなかった。その時に誰にも見つからなかったのは、テティスが二人の周りだけを森の最も奥に遠ざけ、周囲から完全隔離してしてくれたからだという事を……。

一四. 五弦琴

守護精霊テティスは、夜明け前に空間隔離を解いた。ファイーナとクファシルが目覚めて帰り支度を始めたのだ。

「ふう……もういいわよね。」

精霊とて、長時間にわたって能力を使い続ければ疲れる。ましてやテティスはファイーナが発作を起こさぬようと、自分の分身をファイーナの体内に入り込ませて心臓の鼓動を制御し続けてもいたのだ。彼女は湖面に寝転んで心身を休めた。

「でも、本当に良かったわ。今までは両方とも遠慮してたもの。ファーニヤの命はあと二年しか持たない。あの二人には一点も悔やませたくない。」

彼が推測した通り『クファシル』とは、かつてテティスが愛した男の名である。彼女は彼女自身の生前の夢を彼らに託していた。

精霊となってさまざまな愛を見てきた。激しい恋、穏やかで優しい恋、結ばれぬ恋もあった。家族愛もいろいろあった。そのどれもが彼女にとっては見守ってあげたい対象に思える。

しかし、いつにもまして、ファイーナは彼女自身に、ライブラはかつての恋人クファシルに、性格や境遇がとてもよく似ている。若くして落命を運命づけられた恥ずかしがり屋の女性と、聡明この上ないが堅苦しい話し方かできない男性……。感情移入もしたくなるだろう。

「それにしても、あの二人は私とあの人にあまりにもよく似すぎている……。今だってまるで私自身が実際にあの人に抱かれて満たされたかのよう……。まさかあの二人は?!」

強い衝撃に煽られながらも、睡魔がテティスに襲いかかる。交わり疲れた処女のように、彼女は深く眠りに落ちた。



「この森は小さい頃、よく遊びに来ていたの。だから、帰り道は任せて。」

ファイーナが案内がてら先に立って歩く。どうやら彼女は幼少期、森のあちこちに名前をつけて遊んでいたらしい。

クファシルには、朝霧の中を進んでいくその姿がまるで光の中を舞い飛ぶ蝶のように見えた。
(やはり君は可愛い……。僕の宝物だ……。)

「おかしいわ……。『榎の広場』からずいぶん歩いて来たのに、まだ『清き泉』だなんて……。」

ファイーナが呟いた。

「どうしたんだ？ 迷ったのか？」

「うーん、なんだかいつもの感覚と違うの。目印にしている物の配置が違っているような……。まるで違う森に来ているみたい。空間ごと配置が変わったというか……。」

ファイーナは、ハッとした。同時にクファシルも気がついた。

「テティス……？！」

「君もそう思う？」

「ええ、彼女なら空間を操れる。もしかしたら……。」

「でも、それならそれでいいじゃないか。ちょうど良い、この泉に浸かっていこう。」

二人は無事に宮殿玄関まで帰って来た。警護官が二人に気づいた。

「あ、姫様とクファシル公卿殿下！ 今時分どうしてこちらに？」

「おはよう、ペーチャ。星祭りで空を見ているうちに、二人とも眠ってしまってね。」

クファシルが言った。明らかな嘘である。だが、警護官も軽く受け流した。

「左様でございましたか。どうぞお通りください。」

その日の夕方、クファシルは考えめぐねながら五弦琴を見つめていた。やがて、それを棚から取り出して、出かけようとしたところを、ファイーナに見つかった。

「さっきからずっと見てた。何か思い詰めてるんじゃない？ それに、その五弦琴をどうするの？」

彼は、しばらくファイーナを見つめてから答えた。

「テティスに訊きたいことができた。けれども、それは君には辛い内容も含まれる。どうしたものかと思ってね。」

ファイーナには、それだけで話の内容が予想できた。

「私なら大丈夫よ。もう覚悟はできてる。一緒に連れてって。」

「ファーニャ……。それじゃ行こう。」

湖に霧が垂れ込める。テティスが姿を見せた。

「今日は二人で来ましたね。」

「テティス、昨夜はありがとう。僕たちをずっと守ってくれていたのだろう？」

「分かってしまいましたか。」

「あのあと、森の中の空間がいつもと違うと、彼女が気がついた。そんなことができるのは、貴女だけだ。」

「あら、しまった！ 空間隔離は解いたはずだったけど、あとは元に戻さないまま眠ってしまったのね。ごめんなさい。」

「私からもお礼を言わせて。テティス、本当にありがとう。」



ファイーナが言った。クファシルが一步前に出た。

「それから、今日はもう一つ話がある。…この五弦琴、僕が弾くのは駄目かな。」

ファイーナが思っていた通りだった。クファシルは、彼女亡き後の話をしに来たのだ。

「ファーニヤの歌声のようなわけにはいかない。僕は男だし、取り立てて声が甘いわけでも、上手いわけでもない。そもそも歌ったことがない。しかし、…」

彼は一瞬言い淀んだ。

「しかし、ファーニヤのあとは誰が貴女に歌を聴かせるんだろう？アリオーシャにはまだ妃の当てがない。これからあと残された時間は少ない。そうすると、彼女から教わって語り継ぐのは僕しかいないんじゃないか…。」

今日、この話をしに来るのに、ファーニヤには黙って来るつもりでした。でも、彼女も今の話の内容を予測してついてきてくれたのだと思うのです。

「テティス、しばらくのあいだは僕の歌でいいですか？」

クファシルは真剣だった。横からファイーナが涙を抑えながら見つめている。

テティスは、微笑んで言った。

「クファシル、私がここで五弦琴と一緒に聴かせてもらっている歌は、魂の歌声なの。上手い下手は関係ありません。心が澄んでいればそれでいいの。私は、みんなから心を聴かせてもらっているだけ。

貴方も、心の綺麗な人。私は喜んで貴方の歌声を聴きましょう。ファーニヤとの相聞歌、私とても嬉しかったですよ。

「ファーニヤ、まだ時間はあるわ。時には夫婦二人で歌って。」

微笑むテティスを前に、ファイーナはどうとう堪えきれずに泣き出した。クファシルが抱きとめる。

「ごめんなさい。泣かないつもりだったのに。」

「僕のほうこそ済まない。やはり君を連れてくるべきではなかった。だけど、今度から二人で来よう。相聞歌と一緒に作って歌うんだ。」

「うん…。」

気がつくと、テティスの姿は消えていた…。

一五. 矛盾する苦悩

ファイーナ姫が前にも増してますます美しくなったらしい…。街中でそんな噂が広まりだしたのはその年の秋だ。

アルティオ帝とアレクセイもやはり同じように感じていた。笑顔が多くなり、周りに父帝とアレクセイしかいない時、ファイーナは時に子供のように甘え、クファシルがそれを柔らかく受け止めている様は、微笑ましい以外の何ものでもなかった。

最近になって、ファイーナはクファシルに五弦琴を教え始めたらしい。そうすると、また夫婦二人で過ごす時間が長くなる。

(やっぱり、姉上は兄上と一緒の時が一番いいんだ…。)

アレクセイの心は、ファイーナの幸せを願う気持ちと諦めの気持ちの狭間で揺れていた。表立って口調は変えられても、内心では、今までの呼び方、今までの憧れの気持ちが抜け切れていなかったのだ。確かに家族だと思ってもらうのは嬉しい。そのうちに慣れさえすればとも思う。しかし…。



それにしても、ファイナの幸せそうな様子を見ると、自分の将来の愛のあり方に不安を感じる。

いつかは自分も結婚するだろう。しかし今は、相手の影さえ見えない。一体どんな感じの女性で、いつどこで知り合い、どのような形で結ばれるのであろうかと思うと、不安でいっぱいになる。いや、何よりもまず自分がその人を今のファイナのように幸せにできるのか、それが最大の問題のように感じられるのだった。

そんな、ある金曜日の夕食前のことだ。

アレクセイは、宮殿内の警護官詰め所に併設された武道場から帰ってきて、珍しくうとうとしていた。

警護官詰め所は、門から湖畔宮殿に向かう道のあいだにあって、宮殿を守る形になっている。詰め所は宮殿を守り、宮殿はテティス湖を守る…つまり湖は二重に防護されているのだ。

その詰め所で、アレクセイは毎週火曜日と金曜日の午後を過ごすようになっていた。彼自身、剣の腕を鈍らせたくなかったし、またがむしゃらになっている時が心地よいことに気づいたからだった。

(アリョーシャ…アリョーシャってばあ、ねえ起きて…)

彼は夢うつつから目を覚ました。自分を呼ぶ声がする。聞き覚えのあるその声は…テティス！

(お話があるの。湖まで来て。)

彼はすぐに駆けつけた。

「テティス、話というのは？」

「ファーニャたちのことよ。彼女がクファシルに五弦琴を教え始めたのは、私に歌を聴かせ続けてくれるためなの。彼、クファシルはファーニャ亡き後のことを考えて、自分が歌ってもいいのかと尋ねに来てくれた。ここに来るときに彼女に見つかって一緒に来たけど。

今の貴方に、この話は酷かもしれない。ファーニャも泣いていたわ。でも、彼女が去るその日はやがて来てしまう。そんな二人の思いをどうか分かってあげてちょうだい。」

「…」

アレクセイは言葉を失った。兄上は、姉上の役割を引き継ごうとしている。姉上もそれに応えようとしている。自分は、そんなことも知らずに、なんて愚かな悩みを抱え込もうとしていたのだろう…。

テティスは優しく微笑んだ。

「大丈夫よ、アリョーシャ。貴方にも、良き伴侶となる女性と出会える時が来ます。あまり考え過ぎないで。貴方は何かと考え過ぎるのよ。ま、それも貴方らしい、良いところなんだけどね。」

「ありがとう、テティス。」

テティスの言うとおりで。レオからも指摘されたのは、つまりは同じようなことなのかもしれない。学ぶべきことはまだたくさんある。それを怠ることなく、しかし全てにおいて自分らしく接していけば良いのだ…。

警護官たちは、最初は戸惑いや遠慮があったものの、皇太子の腕前がとてつもなく上で、いくら本気で打ち込んでも組み合っても彼がびくともしないことが分かると、進んで稽古相手を申し出てくるようになった。宮殿と湖を守るために集められた者たちだけに、みな精鋭の警官ばかりである。向上心もとても高い。

「私はここに来る前は、君たちと同じ警察官だったんだ。まだ巡査だったが。それに、私と同等以上の技術を持つ警察官が二十人、そのほとんどがオルニアにいる。」

「そうだったんですか。」

所長のドミトリー・ザナコフ警視をはじめ全員が話に聞き入る。アレクセイは、警察学校卒業までの経緯をかい



つまんで説明した。

「近いうちに、共にライランカに来た友との打ち合い稽古を見せたいと思っている。彼の方が腕は立つのでな。参考にするといい。」

その友・レオニードは、新人巡査として首都ザラトイブルク市内の派出所に配属されていた。周りの住民は木こりや工芸家、青果店の店員、肉類卸商、郵便配達員など、多種多様である。

朝早く回るのは新聞配達員や牛乳屋。オルニアにいた時の風景とあまり変わらないが、大きく異なるのはやはり自分も周りの人々と全く同じ存在だということであろう。この国では髪の色が藍色なのは当たり前で、誰からも何も言われない。レオニードには、それが新鮮だった。

(なるほど、絶対多数とはこういうことなんだ…。)

しかし彼は、その『絶対多数』が必ずしも正しくないことを身をもって体験していた。

『正義』が、しばしば『普遍的正義』と呼ばれるのは、それが地域によらず、時代にもよらず、ましてや特定の人物の思想や都合にも、加熱しやすい民衆感情にも左右されないということを考慮しているからである。

例えば、惑星市民憲章には、殺生はできるかぎり避けよとある。では、肉類卸商のミーチャは悪者なのか？彼はただ人々に食べ物として他の生き物を提供しているだけであり、またそのような生業の人々がいなければ、人々は生きていけない。矛盾だが、世界はそういうふうになっているのだ。

一六. 海からの訪問者

また季節がひと巡りした。

ライランカの冬は、世界一寒い。極北のオーロラが天を舞い、空気が凍って光るダイヤモンドダストが大地を覆う。周辺海域の波はうねり続け、時には砕氷船が必要となる。

そんな季節でも人々の生活を支えようと、生活物資を運んでくる商船は絶えることがない。ライランカからは上質な木材や野生動物の肉などが輸出される。

この日に到着した穀物輸送船には、オルニアの紫政帝と今井はるか、宮部淳一が乗船していた。さらに春野亜矢も、海洋警察官として任務に当たっている。

「もうすぐ会えるのお…。皆どんな顔をするかな。」

「はい。私も待ち遠しゅうございます。」

紫政帝は、アルティオやファイーナを驚かせようと、わざとお忍びでやってきたのである。

「さてと亜矢、君もおいで。マーベラス長官には上陸の許可も頂いてある。君とて会いたかろう。」

「陛下！格別なるお心遣い、誠にありがとうございます。」

海洋警察は、惑星市民機関の直轄で、いずれの国にも属さない。各国の皇帝といえども、海洋警察には命令ではなく、あくまでも要請という形を取るのである。

紫政帝の一行はさっそく宮殿に向かった。門を守る警護官は、全員が各国要人の顔を記憶しており、紫政帝の顔にもすぐに気がついた。

「失礼とは存じますが、オルニアの紫政帝陛下では？」

「いかにも。よく分かったの。」



「我々警護官は、各国要人の顔を存じ上げております。

どうぞ中へお進みください。私がお案内いたします。…すまん、ニキータ。陛下にお知らせしてきてくれ。あとの者はそのままいるように。」

「了解！」一人が走って行った。

「急に来て、すまなんだの。」

(やはり間違いない。紫政帝陛下だ。)

警護官は、言葉遣いからも皇帝本人と確認した。

一行は『白菊の間』に通された。アルティオとファイーナ、クファシル、アレクセイが入ってくる。

「急に来て、すまなんだ。たまには驚いていただこうかと思ひましてのう。」

「紫政帝陛下、あまり驚かせないでいただきたいものです。度々ながら陛下のお戯れは、私も好ましくは思いますが。」

「しかし、ちゃんと土産は連れて来ましたぞ。ファイーナ姫や公卿殿下ゆかりの者たちです。…お二人とも、仲睦まじいご様子ですな。何より何より。はっはっはっ。」

「どうも恐れ入ります。」

一通りの挨拶が終わると、アルティオ帝以外の三人は背後に控えていた者たちに視線を向けた。

「はるかさん、亜矢さん、ジュン君！」

まずファイーナが歩み寄った。そして、帰化して名前が変わった二人もやってきた。

「彼はクファシル、こちらはアレクセイ。」

「三人とも、よく来てくれたね。」

クファシルが微笑みかける。

「お久しぶりです。」

アレクセイは、まるで昔に帰ったようだった。

「しかし、一番驚いたのは画伯ですよ。あらいけない、皇太子殿下だった！」はるかが言った。

「いや、良いんです。僕もいろいろあって、自分が変わっているのが分かっていますから。」

アレクセイは屈託なく笑った。もはやかつての迷いはほとんど消えている。強いて言うならば剣の腕が落ちていないかどうか心配なだけだ。

そして、はるかも亜矢も淳一も、彼が彼なりの良さを残しながら、皇太子としての素養を身につけたことをはっきりと感じ取っていた。彼はもう、警察学校にいたころの藤原景時巡査ではない…。

そんな、再会の賑やかさの中で、ファイーナは亜矢を見ていた。亜矢はずっと許嫁を探し続けている。

『恋う人は最愛なくば恋ならぬ我を導く夢難かりし』…まだ若く、どんなに抱かれてみたい欲求がほとばしろうと、ファイーナは一人の女として、抱かれるのなら相思相愛の、最愛の人にしか抱かれまい、抱かれてはならぬ、と思っていた。その頃の歌が、星祭りでクファシルに知られてしまったあの歌だった。そして彼は、抱けば壊れそうな私を愛してくれた…。勇気を持って深く心に触れてくれた…。

亜矢にもいつか、その愛する人、ただ一人の許嫁と結ばれる日を迎えて欲しい…。

「姫様？」

気がつくと、当の亜矢が目の前まで近づいてきて、心配そうに彼女を見ていた。



「どうかなさったのですか？」

「いえ、何でもないわ。」

「しかし、姫様がお幸せそうで、何よりでございます。」

「亜矢さん、貴女もいつか愛する方が見つかるの良いわね。みんなも手を尽くして探しています。彼はきっと見つかりますよ。」

もしかしたら私はその時までにはなくなるかもしれない。でも、貴女の結婚式を心待ちにしていた者がここにも一人いたことを、よかったら思い出してね。」

「姫様…ありがとうございます。」

ファイーナは、亜矢の肩を抱いた。亜矢は涙をこらえる。(姫様…。)

「今井君は、まだ派出所勤務の期間だね？」

クファシルが尋ねた。

「はい。毎日をあの商店街で過ごしております。穏やかなものでございます。」

「そうか。とにかく平和なのは何よりだ。」

「はい。」

「ジュンは、皇宮警察どうだい？」

淳一に話しかけたのはアレクセイだ。彼は、リュウと同様に淳一とも仲が良かった。

「は。自分もなんとかやっております。」

「ジュン、君も真面目な奴だなあ。わかるけど、それじゃまるで他人扱いじゃないか。久しぶりに会ったんだ、普通に喋れ。」

「はあ…。そうですか…。」

「そういえば、僕も最近、姉上に同じこと言われたっけ…。」

「え、姉上？」

「うん、今、僕は姫を姉上、公卿殿下を兄上と呼ばせてもらってるんだ。調子が狂うって言われてね。」

「…そうだったのか。良かったな、景時。」

「そうそう、それだよ！」

二人は笑った。

「そうだ、リュウは派出所勤務なんだ。今から行かないか？時間あるかな？君は今、紫政帝陛下の警護中なのだろう？」

「わしか。わしはあと二時間くらいここにおるから、行って来るが良い。」

紫政帝が言った。

「陛下…どうもありがとうございます！時間内に戻ります！」

こうして、アレクセイ、淳一、亜矢、はるか、ファイーナとクファシルも加わって、レオニードがいる市内の派出所に訪ねて行った。…

「若い者は良いですな。」

あとには、紫政帝とアルティオ帝が残された。

「しかし、あのうちの幾人かとファーニャは今生の別れとなるでしょう。…あの娘が不憫でなりません…今が一番幸せな時だというのに…。」



「…アルティオ帝陛下…。」

「紫政帝陛下、実はそのおつもりで連れてきて下さったのでしょうか？」

「ご推察の通りじゃ。できれば全員を揃えたかったのじゃが、内密になると、あれが精一杯じゃった。申し訳ない…。だが、姫のご様子を拝見して安堵いたしました。本当にお幸せそうですね。」

「紫政帝陛下…誠にかたじけなく存じます。」

アルティオは深々と頭を下げた。

一七. ぐみの実

長い冬が終わり、雪が雨に変わる時期は、麦の植え付け祭りや春迎の儀式が多い。

この頃には、ファイーナの体調を考慮して、公務はアレクセイとクファシルが彼女の分を手分けしてこなすようになっていた。

彼女はだんだん怠さを訴えるようになり、宮殿内を移動するのでさえ、途中で休むことが多くなった。

ナディアは、ファイーナに車椅子を薦めた。

「姫様、誠に申し上げにくいのですが、ご体調がかなり変化していらっしゃいます。長く歩くことも、ご負担になりますゆえ、お部屋を移られて、できる限り横になっていただき、どうしても移動しなければならない時には、どうか車椅子をお使い下さい。」

「そう…。わかりました。そうしましょう。」

ファイーナは自分の死を悟った。前からずっと分かっていたこと…。でも、とうとう来てしまった…。

そろそろ麦の植え付けが終わろうかという季節の、ある日の日暮れ少し前…。この日もクファシルは、ファイーナの傍らに腰掛けて手を握っていた。

「君は、とにかく体を休めなさい。公務はアリョーシャと僕で引き受けるから。」

クファシルは、彼女に知られないようにして医師団とも話し合い、しばらく前から彼女を抱くの控えていた、ただ静かに抱きしめたり、唇を重ねたりはしたが、それ以上のことは無理だと判断していたのだ。

「ごめんなさい…。もうお別れなのでしょう…。でも、愛してるわ。…」

「ファーニャ、何を言うんだ！まだ僕は君にいて欲しい！君が必要なんだ！」

「ありがとう。貴方と会えて良かった…。私にも恋ができた…。貴方は私の最愛の人…。愛しき人…。」

ファイーナは、それだけ言うとゆっくりと目を閉じた。彼女の目からひとすじの涙が頬を伝って落ちた。

「ファーニャ？…そんな、嘘だろ？…ファーニャ！！」

クファシルは彼女の胸に耳を押し当てた。…聞こえるはずの鼓動が…なかった。…

「ファーニャー！」

彼の声を聞きつけたナディアとウラジミルが駆けつけできたが、首を横に振る以外、どうすることも出来なかった。

アルティオとアレクセイも、すぐに駆けつけてきた。

クファシルは、抱きしめていた体を一旦離すと、父帝と皇太子にも彼女の顔を見せた。父は娘を抱きしめた。

「ファーニャ、よく頑張った！よく生きた！お前は私の娘だ！」



アレクセイは泣き崩れた。
「姉上！何故今なのです！何故？！何故・・・姉上ー！」

ライランカ皇女ファイーナ・テジャス 黄昏に死す。享年三十六・・・。

クファシルは立ち上がり、庭に通じるガラス窓を開け放つと、彼女の体を抱きかかえて歩き出した。
「あ、兄上？何処へ？」アレクセイが尋ねる。
「テティス湖に行くんだ。」
彼は振り返らなかった・・・。

湖の畔まで来たクファシルは、止まらぬ涙を頬に流し続けたまま、彼女の名を幾度も叫び、最後に彼女をひときわ強く抱きしめてから、湖面に横たえた。
「テティス、あとは頼みます。・・・」
ファイーナの体は湖の奥へ吸い込まれるようにして見えなくなった・・・。

と、自然にひざまずいていた彼の前に、何やら黄金に光り輝く丸い玉が現れた。玉は、ふわふわと浮かんでいる。
クファシルは、それを手に取った。光がおさまると、彼の手に残っていたのは一粒の赤いぐみの実だった。・・・
「ファーニャ・・・！」
彼は、迷わずぐみの実を口に入れた。赤・・・ファイーナの心の紅色を・・・。

部屋に残されたアルティオとアレクセイも、しばらくは涙を流すばかりだった。
「クファシル、お前も私と同じことをするのか・・・。」
「父上？」
「アリオージャ、クファシルはファーニャを湖に送り届けに行ったのだ。
お前も知っているだろうが、この国では死者は水葬にする。届けるのは、最も近い者、家族だ。ファイーナに
近い者、それはクファシル。・・・私も、あれの母を自らが抱いて送った・・・。」
「・・・そうでしたか・・・。」
「それにしても遅いな・・・。迎えに行こう。」
「僕も行きます。」

クファシルは、湖のほとりで倒れているところを見つけた。
「クファシル！！」「兄上！！」
抱き起こすと、どうやら深く眠っているようだった。涙の跡が残っている。
「泣き疲れたか、クファシル・・・。アリオージャ、手を貸せ。」
「はい。」

二人は両側から肩を担いで彼を部屋へと運んだ。そして父帝は、即座にファイーナのベッドを部屋から運び出させた。
「クファシルが目覚めた時、ベッドを見たらまた悲しみが増す。」
「・・・そうかもしれませんね。」



「お前も部屋に帰りなさい。」

「はい、父上。」

二人は、自分の部屋に帰ると、人知れず泣いた。夜の闇が悲しみに打ちひしがれた宮殿を包み込んでいった。…

翌朝、クファシルが目覚めると、元の部屋にるのが分かった。
(誰かが運んでくれたのか…。そうだ、ファーニャはもう死んだんだ…。ぐみの実になって…。僕はそれを食べて…。そうだ、もう離れることはない。君は僕の中にいる。僕の胸に永遠に！)

一八. 挽歌

翌朝の新聞各紙は、ライランカ皇女の逝去を一面トップで報じた。

ライランカ国内では、国民が三日間の喪に服した。港湾施設や警察など一部を除き、国としての活動が止まったのである。

湖畔宮殿の正門前には、急きょ記帳所が設けられ、朝早くから多くの市民が訪れる。

レオニードも、非番の日に記帳に訪れた。

(ファイーナ様…。)

彼もまた、彼女の素顔をよく知るひとりであった、何しろ最初に出会ったのが、警察学校の入学式で、彼女は制服姿の警視だったのだから、通常とはだいぶ印象が違う。それから二年間も指導を受けた。厳しくも優しい指導官だった。

また彼には、次期皇帝の話し相手に選んでもらった経緯もある。何よりも増して、人となりを認めてもらえたことは、無上の喜びだった…。

紫政帝と風馬皇太子は、他の皇帝たちと同様に哀悼の書簡を送った。

「そうか、とうとう逝ってしまわれたか…。アルティオ帝陛下もアレクセイ皇太子殿下も、さぞかしお力落としてあろう。特に心配なのはクファシル殿じゃ。哀しみを乗り越えられればよいが…。」

「そうですねえ。あの方は姫をとて愛しておいででしたから。自らの職を辞してまで、姫を愛された…。」

「皇宮警察の宮部と小久保にも、気を配ってやっておくれ。教え子としてショックを受けたじゃろうからの。」

「はい、もちろんです。」

紫政帝にとっては、クファシルという名になっても、篤史はもう一人の息子に限りなく近い存在だ。ファイーナ姫と恋愛関係になった時も、自分が二人の仲を取り持ったようなものだ。それだけに彼がどれほど深い悲しみに暮れているかを察して止まなかった。

風馬皇太子も、同じ世代に生まれ、本来ならば皇帝同士として末永く付き合っていたことであろう姫の死が深く悔やまれた。また、時折明禅館を訪れる篤史にも、強い親近感を覚えていた。環境設計の指南をする時の彼はしっかりしていて、兄のように感じたものだ。

(篤史は辛いだろうな…。頑張ってくれよ。)

再び、ライランカ湖畔宮殿…



その日から数日間の食事は、ナディアと管理栄養士監修のもと、食べやすく消化が良く、栄養価の高い献立が出された。トマトスープにラム肉ペースト添えの白パン、青菜のおひたし、アップルスフレとクミナ茶・・・という具合である、

アルティオ、アレクセイ、クファシル共にやはり無口になっていたが、五日目の夕食のデザートに、ぐみの実のプディングが出た時に、クファシルが呟いた。

「ぐみの実か・・・。ファーニヤを送った時に、ぐみの実が現れたっけ・・・。」

その言葉をアルティオが聞きつけ、顔色を変えた。

「なんだって！そんなことがあったのか！それで、お前、それをどうした？！」

彼の勢いの凄さに驚きながら、クファシルは答えた。

「はい、僕はそれをファーニヤだと思って食べました。だから、ファーニヤは今も、これからもずっと僕の中にいるのです。」

アルティオは、自分の胸に手を当てたクファシルをじっと見つめた。やがて、とても優しい顔になってこう言った。

「そうか、お前はそれほどまでにあの娘を愛してくれたのだな・・・。ファーニヤは、ぐみの実になったか。きっとお前が思った通りだよ。ライオンカでは、水葬された魂は、形を変えて最愛の者に宿るといふ言い伝えがある。

私も実はそうなのだ。・・・妃の体を送り届けた時、桜の花びらが降ってきてな・・・。」

アルティオは左の袖をまくった。上腕に桜の花びらのような赤あざがある。

「ここについた花びらを剥がしたら、このあざが染みついたのだ。以来、ずっと残っている。それに、花びら自体も菓子のように甘かったこともあって全て食べてしまった。」

「それでは、父上！」

二人は、花びらの形をした赤あざを見つめた。

「そうだ。これはカナリア・・・私の妃、ファーニヤの母親の名残だ。カナリアもまた、私の中で生きている。

私も言い伝えが果たして事実なのか、あるいは稀なるものなのか、確信がなかったのだが、今のクファシルの話聞いて分かった。言い伝えは本当だったのだ。」

「・・・父上・・・。」

アルティオは、二人があまりに悲しそうに深刻な顔をしているので、敢えて冗談めかして言った。

「だが、安心するがよい。おそらくだが、お前たちに私や互いの痕跡は残るまい。クファシルにはファーニヤの、アリオージャには未来の妃の痕跡しか付かぬだろう。」

二人は、顔を見合わせた。

「たしかに、野郎の痕跡は願い下げだ。」

「僕も、いかに尊敬する兄上とはいえ、男の痕跡は、ちょっと・・・。」

二人とも、くすっと笑った。

王室家族の喪が明けた瞬間だった。・・・

六日目、医務官のウラジミルがクファシルの健康診断をしていた。

「おや？公卿殿下、どこかぶつけられましたか？左の腰にあざがございますが。」

医師は鏡を使って彼にあざを確認させた。

「いや、特に心当たりはないが・・・。」

言いかけて、彼は気づいた。

(ファーニヤ・・・！)



そこは、彼女が彼に抱きつく時、最もよく触れていた場所だった。…

七日目の夜、クファシルは五弦琴を手に、テティス湖に向かった。霧が垂れ込めてくる。精霊が姿を現す前触れた。彼は湖畔に腰を下ろし、五弦琴を抱えた。

いさなとり波満ちてなお君はなくただ思い出の場にて歌わん
あしひきの森青葉かな君が行く末永くとの夢は空しき
くさまくら人の旅路は遠くとも吾は留めん君の思い出
むなぎもの心伝えんさざ波よ行き去りし君今また偲ぶ

ねばたまの闇にて触れし君が肌我が胸すべてそを湛え継ぐ
ひさかたの天満つ星に君が肌抱きて眠る櫂ぞ恋しき
たらちねの幼子のごと君が舞う櫂の森こそ吾は恋しき
あかねさす紫衣を着た君も可愛かりしや過ぎかりし日は

うつせみの心尽くして愛せしをまさに語らんさざ波のごと
あらたまの年月早く過ぎゆきて君なき日々の儚さ辛さ
たまきわる君が命は尽きるとも紅きぐみの実吾が胸に入る
わかくさの妻を想いて折節の日々を偲ばん霜の降るまで

歌い終えて気がつく、テティスが彼の歌に聴き入っていた。

「テティス、いつからそこに…。」

「貴方がそこに座った時からですよ、クファシル。貴方も歌がお上手ね。」

「そうでしょうか…僕にはとてもそうは思えません。」

ところで、あのぐみの実は、本当にファーニャなのですか？そんな言い伝えがあると聞きました。」

「そうよ。あれはファーニャの魂の結晶…貴方はそれを本能的に口に運んだ。貴方たちの絆は本当に強いからね。」

また来て歌って。温かい愛の歌を…。」

テティスは消えた。

一九. カフェテラスで

一年後…

今日もアレクセイは、警護官詰め所で汗を流して帰ってきた。夕食のデザートを食べているとき、アルティオから話しかけられた。クファシルは大陸の反対側にある街の行事に参加していて、その日は不在だった。

「ときにアリオージャ、お前は誰か見つけておるのか？お前もそろそろ妃を娶らなければならんだぞ。即位してからでは難くなる。」

「はあ、そうですね。しかし、なかなか出会う機会がなくて…。」



「見合いは嫌なのか？クファシルがいくらお膳立てをしても、首を縦に振らぬというではないか。お前もさほど鈍感ではあるまい。気づいているはずだ。」

「はい。兄上のお心遣いは有難く思っています。でも、僕はやはり自分の妻は自分で見つけたいのです。」

「ならば、もっと出歩け。可能な限りの外出もさし許す。警察官級剣士のお前なら自分で身を守ることもできるだろう。」

「はい。ありがとうございます。」

アレクセイは、まだ心の奥底にしまい込んだファイーナへの思慕が抜けきれないでいた。他の女性を見ても、恋愛とはほど遠く感じてしまうのだ。

だが、自由に市中を出歩けるとなれば、可能性は広がるかもしれない。彼は警護官詰め所の稽古を早めに切り上げて市中を出歩くようになった。

首都ザラトイブルクの街並みは、とにかく美しい。

建物の壁は白に、屋根の色は茶色に統一されている。街路樹が立ち並ぶ道には塵一つ落ちていない。ごみ自体あまり街中の道に落ちることはないし、落ちていたにしても全て通りがかった市民の手で即座に街角の黄色い箱に入れられる。ライランカ人は美意識が強いのだ。自分の住む街は、常に美しくしておかねば気が済まないらしい。

道行く人々の服装も、色とりどりの民族衣装で、それぞれに工夫が施されてはいても、揃っているという印象を受ける。

そんな日々のある火曜日、彼はふと思立って、それまでは通り過ぎてきた洋服屋の角にある小道を曲がってみた。

しばらくいくと、小さなカフェがあり、テラス席のあいだから三歳くらいの男の子が飛び出してきて転び、今まさに泣き出そうとしているところに出くわした。

アレクセイは、その子を咄嗟に抱き上げた。

「泣くんじゃない。男の子だろ。」

男の子は、突然知らない人に抱き上げられて驚いたらしく、泣くの忘れて彼の顔をじっと見つめた。

「よーし。良い子だ。」

彼はその子を下に下ろして、肩をポンポンと軽く叩いた。

「エド！大丈夫？怪我してない？…あら、すみません。ちょっと目を離した隙に…」

近づいてきた女性がいる。可愛らしい感じの女性だった。

「おばちゃん！」

男の子は彼のそばを離れて、その女性に駆け寄った。

「甥がお世話をおかけしました。」

少しコロコロするような声で、彼女は言った。

「甥御さんだったか。このくらいの子は危ないからね。」

アレクセイは、そう言って、また子供を見た。

「あら？どこかで見覚えが…皇太子殿下？！ただいまさかお一人で街の中にいらっしやるはずはないし。でも、そっくり…」

「うん、私はアレクセイ。皇太子を務めている。」



彼は微笑んだ。

「えっ！本当に？・・・し、失礼いたしました！エド、膝を引いて。私はマリン・スニエトスカヤと申します。これは姉の子でエドワード・マハコフです。」

彼女は慌てて膝を引き、男の子にも同じことをするように言った。男の子は、分からずにそのまま立っている。

「いいのだ。小さな子には、まだ無理だよ。ただのお兄さんでいい。」

「殿下、どうもありがとうございます。」

エドワードが遊具で遊んでいるのを見守りながら、アレクセイはそのマリンという女性と話をすることができた。

彼女は近くにある国立博物館で学芸員として働いている。エドワードは姉・シエナの息子で、母親が病院の看護師として働いているあいだ、マリンが面倒を見ているとのことであった。博物館は火曜日が休館日で、日曜日に休める姉のシフトとうまく咬み合っている、ということだ。

「なるほどね。よくできているものだ。」

「はい。それで何とかこの子の面倒を見ています。来年から幼稚園に上がると、姉が帰る時間まで預かってもらえるのですが、それまでは。」

「大変だね。」

「いえ。家族ですから。」

彼女は幸せそうに微笑んだ。

(何だろう・・・この人と話していると落ち着く・・・。)

新しい感覚だった。初めは可愛い人だと思った。でも、話をしていると、明るいだけではなく、聡明さが滲み出てくるのである。

(こんな人が「おかえりなさい」なんて言ってくれたら・・・。あれ、何を考えてるんだ。さっき初めて会ったばかりじゃないか・・・。)

彼女は髪を緩く束ね、金色の髪飾りをつけている。日の光を浴びて、髪飾りが煌めいて見えた。

帰り際に彼は尋ねた。

「もし火曜日この時間にここに来たら、また君と会えるかな？」

「えっ、はい。たぶん・・・。」

マリンのほうは何故そんなことを訊かれたのか分からないようだった。ただ甥の手を引いて帰って行った。

それにしても、小さな子を抱えて働く女性の大変なこと・・・。何とかしてやれないものだろうか。

アレクセイは、さっそくアルティオに話してみた。

「小さなうちほど育児は大変なようです。何とかしてやれないもののでしょうか？」

「なるほど。学童保育は作ったが、その下の子は受け皿がないか・・・。」

実は、かつて一度検討してみたものの、人材と場所が不足していたことから断念したことがある。それに、小さな子はすぐ熱を出す。皆が責任を持ってないというのだ。医師を派遣するにも数や予算が途方もない、ということだな。」

アレクセイは、しばらく考えていたが、思い立って言った。

「それなら、いっそのこと、病院で預かるというのはどうでしょう？大きな病院では、空いた場所が必ずあるはずですよ。当然医師が居ますし、二十四時間体制ですよ。責任は全て国が取ることになれば、引き受けてもらえませんかね。」



アルティオは驚いた。こいつは、短時間でなんという大胆な発想をするのだ。だが、たしかに悪くない案だ。
「分かった。会議を作って、かけてみよう。」

その夜、寝床に入ったアレクセイの脳裏に、昼間会ったマリンの顔が浮かんだ。
(彼女、可愛かったなあ。国立博物館か……。幾度も入っているが、彼女みたいな人は見かけた覚えがない。裏方かもしれないな。)

二〇. 大切な数分間

三日後の金曜日、アレクセイの姿は国立博物館にあった。何故かそわそわして落ち着かず、足が向いてしまったのだ。

博物館長のピョートルに面会を求めると、すぐに会ってくれた。

「これはこれは。殿下にはご機嫌麗しゅうございます。して、ご用件は何でございましょう？」

アレクセイは、皇太子になった当時から幾度となく訪れているので、ピョートルは今回も彼が何かを学びに来たと思っただけらしい。

「忙しいところを申し訳ない。実は、職員名簿を見せて欲しいのだ。」

「はあ……。他ならぬ皇太子殿下のご希望とあらば、お見せすることはできますが、なにゆえに？うちの職員が何か？」

「いや、ただ確かめたいことがあるだけなのだ。あまり気にしないでくれ。」

彼は名簿をササッとめくってマリンの名を探した。

(あった……。)

古物修復部という部署にマリンの名があった。やっぱり裏方か……。

「この古物修復部、ちらっと覗かせてもらえないかな？」

「古物修復部……ですか？まあ、面白いと言えば面白いですけど。静かなところですよ。」

「できるだけ邪魔にならないようにするよ。廊下からも見えるのだろう？それだけでいい。」

古物修復部をガラス越しに覗くと、数人が古くて今にも砕けそうな木の束を丁寧に一枚ずつ剥がして、テーブルに並べているところだった。繊細さと集中力が求められそうな作業だ。

「今は、古代の書物を整理しています。それらはできる限り元に近い状態に組み立てられて、解析され、それから保管庫に入れられます。解析した結果の内容は、基本的に国立図書館に渡されます。」

「うん。……」

アレクセイの目は、修復されている書物ではなく、白衣で髪を固く上部に結い上げ、覆いをかけて作業をしている職員の一人に向けられていた。

(間違いなく、彼女だ……。)

館長も、若き訪問者の視線が何処にあるかに気がついた。

「マリンがどうかしました？彼女は真面目な子なんです。」

アレクセイは、館長を少し離れた場所まで誘導してから口を開いた。

「ペーチャ、今から話すことはどうかくれぐれも内密に頼む。マリン本人にも、私が来たことは内緒にしておいてく



れ。

実は、三日前に街中で偶然会ったのだ。少しだけだが話もした。それ以来、どうしてか気になっている。今日も、彼女が働いているところを見たくてここに来たのだ。」

「では、殿下が今日いらしたのは、働いているマリンをご覧になりたかったからなのですか？」

「そうなんだ。三日前に会ったばかりなのにおかしいかもしれないが。」

「…そうでしたか。あの子はよくやってくれます。コロコロとよく笑うので、周りが和みます。休みの日は小さな子の面倒を見ているようですが。ああ、もしかしたらその時に？」

「うん。甥御さんだと聞いたが。」

「はい。あの子の一家は海運業で、海に出たら長期間帰らないのだそうです。」

「そうか。それで事情が分かったよ。」

火曜日、あのカフェテラスに行くと、やはりマリナーがエドワードを見守りながら座っていた。

「やあ、マリナー！ やっぱりいたね。こんにちは、エド。」

「皇太子殿下！」

マリナーはゆっくり立ち上がり膝を引いた。エドワードはただ彼を見つめている。

「エド、しばらくおばちゃんを借りていいかな？」

「うん。」

「ごめんな。あとでお兄ちゃんが遊んであげるからね。」

「殿下、よろしいのですか？ 貴重なお時間を…。」

「マリナー、今からの数分間は僕にとってこの上なく大切な時間になる。それ以上のことはないんだ。」

「えっ？」

驚いて少し見上げた相手の顔は、彼女の義兄が姉と話しているときと同じ、ごく親しい者を見つめる男のものだった。

「殿下？」

アレクセイは、膝をついていた彼女の両腕を持ってゆっくり立たせ、左手を握った。

「マリナー、僕と結婚を前提にしたお付き合いをしてくれないか？」

「え…。殿下と？ 聞き間違えてない…ですよね？ 私…。」

「大丈夫。でなきゃ、女性の左手をこうして握ったりしないよ。僕が生まれ育ったところでは、男性が愛の告白をするときには女性の左手薬指に口づけをするんだ。こうやってね。」

アレクセイは、マリナーの左手薬指に軽く口をつけた。彼女は立ちすくむ。

「驚かせて済まない。出会ったばかりなのに変だよ。でも、あの日からずっと君のことが頭から離れない。もし他に恋人がいないのなら、僕と付き合っしてほしいんだ。」

疲れ切って帰った部屋に君が出迎えてくれたら、どんなにか心が安らぐことだろう。そう思ったら、居ても立ってもいられなくなった。お付き合いしてみて、合わなそうなら、それでも構わない。どうかな？」

アレクセイの顔は真剣だった。口調も穏やかで、決して押し付けてはいない。しかし、彼の眼差しに引き込まれそうで、断れない感じがした。

「わかりました。私でよろしければ…。」

彼女は、即座に答えている自分自身に驚いた。

(なんで？ どうして私、こんなに早く答えるの？ それに皇太子殿下なのよ！)

「よかった！ ありがとう！」



それじゃまた日曜日の仕事が終わったら、ここに来てくれ。日曜日なら、二人きりで会えるだろう。まずは、そうだな、僕がこの国に来るまでの話でも聞いてもらおうか。

さて、エドと遊んでくれることにしよう。」

それだけ言うと、彼はエドワードの近くに行って一緒に遊び始めた。

マリンの薬指には彼の唇の感触が残っている。一方で、エドワードと石蹴りをして遊んでいる彼は、あたかもエドワードより少しだけ年上の子供のようにも見える。どちらが本当の彼なのか……。でもそのどちらもが好ましい。

「殿下……。」

この国に来るまでの話……。そういえば数年前の立太子礼のニュースで、皇太子はオルニアから選ばれてきた人だと言っていた。どんなふうに住らしていたんだろう。聞いてみたいなあ……。

二一. アレクセイの求婚

アレクセイは、マリンを行きつけのレストラン『コーシカ』に連れてきた。店主のミハイルは、彼を皇太子だと知っているが、敢えて特別扱いしない。彼にはそれが有り難い。

「おや、アリオージャが女の人を連れてきたとは！ 珍しいこともあるものだ。彼女かい？」

「いや、まだこれからさ。」

アレクセイは彼女を窓ぎわに座らせ、自分はその向かい側の席に腰を下ろした。夕焼けから夜へと変わっていく街並みは、黄金という名を持つに相応しい姿になる。彼はレストラン自慢の名物料理を注文した。ラム肉のハーブ焼きだ。

「君もこれからは僕をアリオージャと呼んでくれ。そのほうが気楽でいい。」

さて、と……。じゃあ、まず僕の生い立ちから話そう。」

マリンは彼を見つめる。この人のことを知りたい、そう思って、今日ここに来た。でも、私にとってこの人はどんな存在になっていくのだろう……。

「僕は、オルニアの首都・湯井岡市内で生まれ育った。その頃の名前は藤原景時。父は樹木医であちこちを回っていて、家を空けることが多かったが、それでも多くのことを教えてくれた。人として、また男として如何にあるべきか、また樹木医の知識もね。

母は、ともすれば一人で絵を描いてばかりで隠りがちだった僕を、なるべく外に連れ出して近所の子供たちと一緒に遊ばせた。『たくさん遊ばないと、立派な大人になれないわよ』というのが口癖だった。

絵が好きだった僕は、美術大学に入った。しかし、その在学中、両親は火事で亡くなった。突然だったよ。……」

マリンは、哀しそうな顔をして俯く彼を見た。おそらく亡くなった両親を思い出したのであろう。こんな時にかける言葉が見つからない。でも、彼に何かしてあげたい……。彼女は、そっと彼の手には自分の手を重ねた。

「ありがとう。やっぱり君は優しいんだね。……」

そうして、なんとか大学は卒業したが、そうそう上手く画家で生計を立てられる訳もない。街の広場で似顔絵描きをしていた。

ある日、一人のライランカ人が通りかかった。これから髪を切りに行くから、記念に似顔絵を描いて欲しいという。そして、自分は警察学校の副校長で、訓練生を集めている、もしよかったら、警察学校で訓練を受けてみな



いかと誘われた。絵を描きながらでも警官はできるから、と。

実際、似顔絵を役に立てている警官の話も聞いていたから、僕はその話を受けた。普通は二年かけて取る巡査資格をその学校では一年で取らせて先に進む、それだけにとても厳しい訓練ではあったけれど、楽しい日々でもあった。」

マリンは、制服を着たアレクセイを思い浮かべた。そう言われれば似合うかもしれない……。

「そしてあと半年で卒業というときになって、僕は、自分に声をかけてくれたライランカ人女性の本当の身元を明かされた。それがファイーナ姫だった。

ファイーナ姫は、その時すでに余命宣告を受けていて、次期皇帝候補を探しに来られたということだった。そして僕を選んでくださったんだ。

勿論その時は、ずいぶん迷ったよ。なんと言っても、一国を統制する重責だ。だけど、警察学校で身につけさせてもらった知識と技術は並大抵のものじゃなかった。その力は、正義にこそ使われるべきではないのか、と思ったんだ。また、もし僕が断れば、警察学校のみんなの成果が、ファイーナ様や校長の加賀警視正たちの指導がひとつ無駄になってしまう。

ファイーナ姫が僕のどんなところを選んでくださったかはまだ分からない。でも、やれるだけやろう、そう思ってお受けした。

それに、ファイーナ姫と加賀警視正が愛し合っていることを知っていたから、僕はその行く末をどうしても見届けたかった。加賀警視正というのは、今のクファシル公卿のことなんだけどね。」

彼は、外が暗くなっているのに気がついた。

「そろそろ外が暗くなってきたようだ。続きはまた来週にしよう。送ってくよ。」

マリンは、姉一家の家に同居していた。

「あら、マリン、遅かったわね。」

迎えに出たのが姉のシエナなのだろう。なんとなく似ている。

「ごめんなさい、お姉さま。こちら、皇太子殿下。」

「えっ？」

シエナは、そのとき初めてマリンを送ってきた人物がいることに気づいた。

「こ、皇太子殿下！」

慌てて膝を引こうとする。

「あ、そのままいい。それに、どうかマリンを叱らないでやってくれ。僕が食事に誘った。これから、結婚を前提にお付き合いしたいんだ。」

「殿下？本当なのですか？……マリン、貴女まさか……？」

シエナもたいそう驚いた顔を見せた。皇太子と結婚するということは、将来的に王妃になることを意味する。大変なことだ。

「私もまだ分からないの……。でも、今はお話ししたい……。」

「マリン……。」

姉は妹が急に大人びた表情になっているのを見た。

「そう……貴女も恋をしているのね。いつの間にか大人になって……。」

次の日曜日、アレクセイはマリンを『コーシカ』の二階席に案内した。他に客は一組いたが、先に帰った。その



日の料理は、サーモンのクリームシチューで、彼はブランデーも注文した。

「先週の話の続きをしよう。そんなわけで、僕とファイーナ姫と加賀警視正、あと一人の四人でライランカ行きの船に乗って来た。

アルティオ帝陛下には、その時初めてお目にかかった。僕が今のアレクセイという名前になったのは、その時だ。

ファイーナ姫がクファシル公卿と結婚して幸せになったことは、君も伝え聞いているだろう。お二人の幸せを身近で見届けられて、僕は本望だった。

だけど、僕は一人の女性をあれほど幸せにできるのだろうかと思う。

正直言うと、僕が今まで独身だったのは、その心配があったからなんだ。恋愛したいと思う人にも出会わなかった。…でも、君は違う！」

アレクセイは、しっかりマリンを見つめた。

「こんな人が毎日部屋に居て出迎えてくれたら…出会ったその日にそう思った。僕の一目惚れだ。

マリン、僕の妻になってくれ！もっと君を知りたいんだ。いっぱい話していたいんだよ！」

「アリオーシャ…私と同じ。もっとよく貴方を知りたいの。こんな気持ちは初めて。…」

ブランデーの香りが満ちた。出会いから、わずか一ヶ月後のことだった。

閉店を告げに来たミハイルは、二人が口づけを交わしているのを見て、そのまま引き返した。

(やっぱり『彼女』だったんだ。おめでとう、アリオーシャ！…こりゃ、国じゅう賑やかになりそうだ…。)

二二. 王宮へ

アレクセイは、マリンを家まで送り届けた。扉を開ける前に、彼女に確かめる。

「これから、君のお姉さんに話す。そうしたら、後戻りはできない。いいね？」

マリンは、彼の目を見つめた。静かに全てを見つめてきたような瞳…。私、この人と結婚するのね。一緒に笑って、一緒に泣いて…。

「アリオーシャ、貴方となら何処へでも行く。」

二人は再び唇を重ねた。

「マリン、おかえり。これは殿下。お送り下さって、どうもありがとうございます。」

姉のシエナが玄関に出てきた。

「シエナ、明後日の火曜日は仕事を休んでくれませんか？マリンとエドと君の三人を、宮殿に招いて話したいのだ。

実はさっき、マリンは僕のプロポーズを受けてくれた。皇帝とクファシル公卿に紹介したいと思う。」

「えっ、もう？」

シエナは驚く。二人が出会ってから、まだそうは経っていないはずだ。

「では、火曜日の朝十時に迎えに来る。おやすみ。」

彼は出て行った。

シエナは、妹の顔を見た。

「マリン、本当にいいの？殿下とはまだ会って間もないはずなのに。」



「たぶん大丈夫。彼は私と同じことを考える人みたい。大切なのは時間じゃない、心のあり方だと思う。私、彼のことをもっと知りたいの。」

「そう…それなら、明後日確かめましょう。お姉さん行くわ。」

火曜日当日、十時きっかりに馬車が着いた。白樺の葉を模した紋章が付いている。ライランカ王室の紋章に違いなかった。

「どこに行くの？」幼いエドワードが訊いた。

「お兄ちゃんのおうちだよ。広いぞお！」

アレクセイが優しく答えた。彼はエドワードを抱えて馬車の前部分に座った。馬車は、湖畔宮殿に向かって走る。

「わあー！すごーい！」

エドワードは、初めて乗る馬車に喜んだ。

宮殿に着くと、アレクセイは二人に言った。

「混乱させるかもしれないから、先に言っておこう。僕が父と呼ぶのがアルティオ帝、兄と呼ぶのがクファシル公卿だ。元を正せば血のつながりはなく、本来ならば皇帝陛下と公卿殿下と呼ばなければならないのだろうが、今は本当の家族として扱ってもらっている。だから、君たちもそのつもりでいてくれ。」

(そうだわ、彼のご両親はもう…。)

マリンは、彼の話思い出した。

アルティオとクファシルはすでに『白菊の間』で待っていた。

「父上、兄上、お待たせしました。これがマリン。そしてシエナとエドワードです。」

「うん。なかなか可愛い子じゃないか。でかした、アリョーシャ。」

アルティオが言った。

「本当に、人に心配をかけておいて何だ。隠してたんじゃないだろうね。」

クファシルも、にこにこ顔で出迎えた。

「申し訳ありません、兄上。本当に、この一ヶ月で知り合ったんです。一目惚れというか…。」

お茶とお菓子が運ばれる。エドワードは、宮廷職員に中庭に誘われて菓子を食べさせてもらって喜んでいる。

「悪いが、一応身元を確認させてもらった。ご家族は、海運業だそうだね。」

「はい。規模は小さいですが、主に木材の輸出産業です。」

「必要なら、午後は保育士を派遣してエドワードの保育に当たらせるが？」

「えっ、そのようなことまで…。よろしいのですか？」

「勿論だとも。私たちも、早くアリョーシャに結婚してもらいたいからね。」

こちらこそ、幼児保育を不備のままにして済まない。今、会議にかけている。」

「皇帝陛下…。そんな。」

紫政帝もそうだが、行政の不備を詫びるのは皇帝として当然と考えている。それだけ責任が重いのだ。

「いや、君たちだけではない。小さな子を抱えて働く女性すべてのためになることだ。アリョーシャが良い提案をしてくれたのでな。」

「皇帝陛下…。」

この方々なら、マリンを嫁がせてもいいかもしれない…と、シエナは思った。



マリンは、さっそくその晩から宮殿のゲストルームに泊まることになった。マリンとシエナは驚いたが、アレクセイの意向はとても強かった。

「婚約を発表して、君に何かあったらと思うと、気が気でないんだ。それから、君には覚えてほしいことがたくさんある。五弦琴も弾かなければならない。」

「五弦琴・・・。」

「教えてくれるのは、兄上だ。僕と一緒に習おう。」

「いろいろあるのね。」

マリンは、アレクセイを見た。この人が皇太子であってもなくても関係ないと思っていたけれど、現実問題として王室ならではの事柄が多く存在することは間違いない。それは仕方がないことだ。

翌日、マリンはアレクセイに伴われて国立博物館に出仕した。辞表を出すためである。館長のミハイルは、このことを予見していたらしく、あっさりと辞表を受け取った。

これにはマリンのほうが驚いた。

「よろしいのですか？」

「無論、君のような優秀な職員を失うのは惜しいがね。皇太子殿下が、君が働いているところを見に来られた時から予想はついてたよ。おめでとう！」

「えっ？！アリオージャが？いつの間に！」

アレクセイは頭をかいた。

「いやー、つい気になって、ね。」

知らないあいだに見られてたんだ・・・マリンは急に恥ずかしくなった。

二三 油絵の匂い

マリンは、王族の食卓に加えられた。そこにはアレクセイだけでなく、アルティオとクファシルも同席しているのだ。

「皇帝陛下、公卿殿下とお食事、まことに光栄に存じます。」

初めて参加した時、彼女は緊張して言った。まるで夢みたい・・・。

「マリン、そんなに緊張しなくていいんだよ。もうすぐ君も私たちの家族になるのだからね。待ちに待ったお嫁さんだ。」

アルティオは微笑みかけた。

一方、アレクセイはマリンが座っている席が、かつてファイーナのものだったことに複雑な思いを抱いていた。

確かに、自分が特別な感情を持つ女性が時を違えてファイーナと同じ席に座ることは、どうしても彼に二人の存在を重ねさせる。しかし、マリンがファイーナに見えるようなことは決してない。その点では、アレクセイは安堵していた。マリンは、ファイーナの代わりでも何でも無い。何者にも替えがたい、たった一人の彼の伴侶なのだ。

それからしばらくの間、アルティオとクファシルは、マリンを観察していた。将来の皇后になるに相応しいかどうかを見極めようとしたのである。家が海運業ということで、国際的に通用する行儀作法は教わっていたらしい。



加えて、何をさせてもそつなくこなす勤の良さ。彼らは感心するばかりだった。

そして、何より驚いたのは、彼女が初めから五弦琴が弾けたことだ。

「博物館では遺跡から発掘された楽器の修復も致しましたので。」

と、彼女は言った。

「その際に五弦琴演奏家の方から詳しい構造を伺いながら、しばらく音を鳴らしておりましたら、五弦琴の音がすっかり気に入ってしまい、習ったことがあるのです。でも、歌を作るのは・・・。」

クファシルは応えた。

「それは心配ない。君が思うままを歌えば、彼女はきっと喜んでくれる。それにしても、アリオージャはよく君のような人を見つけたものだ。私の下手な講義は必要ないな。」

「彼女？それでは王家の五弦琴とは、どなたかに聴かせるための五弦琴なのですか？」

「うん。守護精霊テティスにね。私もそれをファーニャから聞いた時は驚いたが、君ももうすぐ会えるだろう。」

「守護精霊テティス・・・。」

テティスが実存していることは、マリンも伝え聞いているが、その彼女に対して王族が五弦琴を弾いて聞かせているとは知らなかった。

アレクセイは公務の合間にマリンを連れて湖畔宮殿のあちこちを巡った。彼女に宮殿の内部を知ってもらうと同時に、職員たちにも彼女を紹介して回ったのである。やがて、最も奥まった部屋をひとつひとつ説明する段になった。クファシルの部屋、アルティオの居室、そして最後に案内したのは自らの部屋だ。

中に入ると、いっぼう変わった匂いが漂う。しかし、古物修復作業を担って来たマリンには、それがすぐに絵画に使われる油のものだと分かった。

「これは・・・。油絵の具の匂い？」

アレクセイは、少し驚いた様子で彼女を見た。

「よく分かったね。ときどきここで絵を描いてるんだ。」

「そう言えば、貴方は画家だったのよね。」

アレクセイは照れくさそうに笑った。

「売れなかったけどね。」

そうして、部屋の奥に招き入れ、自分が書きためてきた絵を見せた。だいたい湖畔宮殿の近くの風景や何処かの森の絵だったが、人物画も幾つかあった。アルティオ、クファシル、ファイーナ・・・。中でも、ファイーナの肖像には特に念入りに幾度も手を入れた跡がある。

(アリオージャはファイーナ様のことが好きだったの・・・?)

そんな気がした。

「実は今、君の絵を描いてるんだ。これ、どうかなあ？」

アレクセイがキャンバスを運んで来た。まだ鉛筆スケッチに少しだけ絵の具が足されているような段階だったが、それは確かにマリン自身だ。

「私？私を描いてくれているの？」

「ああ。でも似てないかな？」

アレクセイは、自分が彼女を思って絵を描いていることを知らせたかった。そして彼女の反応を見たかった。

「いいえ・・・確かに私だと思うわ。・・・嬉しい・・・。」

マリンは頬を紅くし俯き加減で暫くのあいだ絵を見つめてから、アレクセイの胸に飛び込んだ。彼は絵を手放して、両腕で彼女をしっかりと受け止め、抱きしめた。



「僕はおそらくずっとこの絵に手を入れ続けるだろう。そう、これからはずっと……。」

「これからは、ずっと……。」

マリンは彼の言葉を繰り返し、顔を上げた。

(気付いたのか……。でも、僕にとって、君は君なんだ。ファイナ様の代わりなんかじゃない！)

アレクセイは、自分でも驚くほど大きな声で叫んでいた。マリンは彼の顔を見つめる。

「マリン……愛してる！君をだ！僕の心には、君しか住めない！」

「アリオーシャ……。」

マリンの身体の柔らかさと温もりを確かめながら、アレクセイは彼女と唇を重ねた。

二四. アレクセイ即位

二人の婚姻を認めるための臨時市民議会が一週間後に開かれることが決まったその日、アルティオは胸にしまっていた思いを切り出した。

「アリオーシャがなかなか嫁を貰わんから、ずいぶん心配したのだが、これで私も安心して退位できる。」

「えっ?!」

この言葉には、マリンのみならず、アレクセイとクファシルも驚いた。アルティオは言葉を続ける。

「もうそろそろアリオーシャに皇帝になってもらおうと思っていたのだよ。私も先帝から譲位されたのは、結婚と同時だった。今のアリオーシャよりもっと若かったかな。」

なに、私は別にいなくなる訳ではない。指導権を完全に移して、それからは上帝と呼ばれるようになるだけだ。」

「父上……。」「陛下……。」

一同の顔に安堵の表情が浮かんだ。惑星市民条約機構の定めの上に王制から皇帝制に統一されたとはいえ、その在り方は国によって異なる。普通に譲位する所もあれば、終身皇帝制の所もある。ライランカ皇帝が譲位後どうなるのかは、クファシルもアレクセイも知らなかった。できるだけ考えたくなかったのだ。

「では、これからも傍で指導していただけるのですね？」

アレクセイが念を押した。

「うん。だが、お前は呑み込みが早かった。もう私が教えることはないと思うがな。」

皇太子の婚約と即位が発表されたのは、次の週の議会承認後のことだ。

お妃候補が生粋のライランカ人で国立博物館の元職員となれば、別段反対される理由はない。

そして、譲位についても、皇帝自身の意思ゆえに尊重しようという結論に至った。

アレクセイも、ライランカに帰化して三年、市民たちと気さくに接し、学びを怠らない彼の人柄は、いつしか国民の尊敬と信頼を得ていたのだ。

その年の五月、アレクセイの即位式と結婚式が滞りなく行われた。

「私は今ここにライランカ皇帝となった。力の限り人々のために尽くす。皆、私に付いて来てくれ。」

それがアレクセイの即位宣言だった。歓声が沸き上がる。

「アレクセイ帝陛下、万歳！」

「我々は貴方様に付いて参ります！」

「マリン皇后陛下、万歳！」



「ご結婚おめでとうございます！」

アルティオとクファシルは、その様子に目を細めた。

「どうやら、二人とも市民たちから受け入れられたようですね。」

「うん。ファーニヤとお前のお陰だ。感謝している。」

その夜、アレクセイは皇帝として初めてテティス湖に行った。マリンも一緒だ。

霧が湖を覆いはじめる。遠くから人影が近づく。人影は、やがて一人の美しい女性となった。

「テティス、貴女はもう知っているだろうが、今日から僕が皇帝だ。こっちは妃のマリン。」

アレクセイがマリンを紹介した。それから彼はマリンに教えた。

「テティスは、千里眼で千里耳なんだ。時間を遡り、空間を動かすことも出来る。」

マリンは、その場に跪いた。

「マリンです。」

テティスは、微笑んで言った。

「ご結婚おめでとう！ 私からも祝福を送ります。」

そんなに畏まらないで、マリン。私は、貴女のこともよく知っているのよ。このライランカ全土が私の視界。それに、貴女はもう王家の一員。私に五弦琴を聴かせてくれる最後の人となるでしょう。」

アレクセイが驚いて尋ねる。

「最後の人って…どうということなんだ？！テティス！」

言うてから、彼は思い出した。

「貴女が救われる日が近い、そういうことなのか？」

精霊テティスはそれには答えずに言った。

「それから、マリン。落ち着いたら、五弦琴を持って来て歌って。楽しみにしています…。」

テティスは消えた。

「テティス…。貴女はやはり…。」

「どうということなの、アリヨーシャ？」

「マリン、君は『星法の書・宝華品』の中身を細かく記憶しているかい？」

彼は少しのあいだ目を閉じた。

「あの中には、テティスのことも書かれている。年代から推測して、テティスの精霊としての寿命はもうそろそろ尽きる筈なんだ。彼女は、その寿命が尽きる間際、苦しみから救われる…そう書いてあるんだよ。」

帰ろう…。テティスは、僕たちを祝福してくれた。今夜はそれで充分だ。」

「アリヨーシャ…。」

二人は、皇帝の居室と決まっている『鈴掛の間』に入った。本来であれば、その夜は初夜となるはずであったが、二人ともそんな雰囲気ではなかった。普通に寝間着に着替えて、寄り添って横になる。

「アリヨーシャ、テティスはいなくなるの？」

アレクセイは仰向けになったまま答えた。

「おそらく近いうちにそうなるんだろう。詳しい事情は、僕にも分からない。だけど、彼女が何かを抱えていることは確かだ。」



その様子を、テティスは湖から見ていた。

「ありがとう、アリョーシャ、マリリン。もうすぐ全てを話せるわ。私はもう既に救われたの。あとは帰るだけ・・・。」

